

ナツメグ探訪記

Almin

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夏目 恵（N u 2 m e g／ペッパー・カルダモン）のシャングリラ・フロンティアプレイ二次創作です。

目 次

魚を巡り地底へ潜る	1
快速への憧れ	13
ゼンイチ一本勝負	23
神話の森と林檎のケーキ	41
これもある意味では鍊金術	54
昇り坂の先に果ては無く	63
天駆けるポテト	78
空飛ぶポテトの果ての先（深淵）	88
サウス t o ウエスト o n フライドポテト	96
万全を期して休養に走る	104
マイインスタイル	112
赤く赫く蝶にむけて	124
屑鉄の街	131

魚を巡り地底へ潜る

「涙光の地底湖？」

シクセンベルトへと向かう道、神代の鐵遺跡を歩きながら、ケイ
……オイカツツオに訊ねる。

「ああ、ペンシルゴン……つてのがプレイヤー名なんだけど、あいつが
見つけた隠しエリアでね」

「ペニシルゴン……どこかで聞いた気がするけれど誰だつたかしら。
少なくともシリヴィアではないことは確かね。」

「聞いたことのないエリアね」

「情報の抱え込み、つてやつだね。VRMMOこういうゲームだとよくある話でね。
ウイキや攻略サイトに無い情報も星の数ほどある」

ケイの問いに頷きで返す。

このゲームを短期間ながらプレイして分かつたことは、
シヤングリラ・フロンティアでは想定外想像外が発生しやすい、ということ。

ラック・ピニオンから教わったプレイヤーエストも、その一つと
言つてもいいかしらね。一部の生産職以外にはほとんど知られてい
ない情報だろうし。

…………あと、アルミラージ”霧幻萌妖”ジャッククローバーもその一つだつたわね……
「想定外想像外への対応を学ぶにはもつてこい、つてことね」

そうかもね、とケイが笑みをこぼす。

「ただ、それはシリヴィアやサンラクの領分想定外を減らすだと思つてる。僕やペッ
パーはそれだけじゃなくて、想定の幅を広げることも考えないとね」
「なるほど。覚えておくわ」

ブゥウン、という風切り音が、三角形の機械との遭遇を知らせる。
「たしか名前は……デルダユニットドローン、だつたかしら？」

「そうそう。このエリアのノーマルエネミーだね……そういうばっ
ぱーは薬剤師だつて聞いたけど、鍊金術師狙い？」

ケイの【拳気】を帶びた拳がカウンター気味に放たれ、それを正面
から受けたデルタユニットドローンが砕け散る。

「そうよ。あなたとシ……アージエンは前衛格闘タイプだつて聞いて……」

「僕たちに合わせて決めたつてこと?」

「いや、その、ほら! 私つて RPG_{格ゲー以外}は初めてだから、折角ならやつたこの無いことがしたいなつて!」

「ああ、そういうことか。」

「それにサブで剣士は取つてるから、薬剤師だけど多少は近接もできるのよ?」

「それはいいね」

そうして理由を誤魔化した後、私達はプレートを乗り継ぎ、乗り継ぎ、大穴の前まで来ていた。

「ねえ、カツツオ?」

「言いたいことは分かるよ。」

「これ、本当に大丈夫なのよね?」

「そこは保証するよ。何せ一度落ちてるからね。」

「それでも気になるつて言うなら……そうだな。手でも繋いで降りてみるかい?」

一瞬、思考がフリーズする。

「なんてね。冗談だよ」

そして加速する。

「あー、ケイ?」

「なに?」

「その、良ければ、なんだけど……」

頑張れ私。

「流石にちょっと不安だから、手を繋いで貰えると嬉しいかな、なんて……」

◇◇◇

驚いた。というのがその言葉を聞いた正直な感想だ。

メグも(格ゲー限定とはいえ)フルダイブに慣れているし、落_{打ち上げ攻撃}下することにも慣れていると思つていた。

ただ、能動的に底知れない穴に身を委る、と考えると、恐怖するこ
とも納得できる。あいつらにそんな健全な感覚を期待するのはお門
違いだが、同じ事をメグに求めるのもナンセンスだ。

「そう? メグがそう言うなら……はい」

そう言つて俺はゲームの主人公みたいに手を差し伸べた。



「そう? メグがそう言うなら……はい」

そう言つて手を差し伸べるオイカツツオの姿には見覚えがあつた。
確か……そう、昨年のゲーム雑誌の表紙が、ちょうどこんなポーズを
したケイの写真だった。

「ありがとう。助かるわ」

そう言いながら、鼓動が少し速くなるのが、自分でも分かつた。ケ
イに気づかれなければ良いのだけど。

「よし、行こうか」

視界が真っ暗になる。

胃が持ち上がるような不快感に襲われ、思わず目を閉じる。

暗闇の中、ケイの手の感触だけが鮮明に感じられる。

「…………う…………?」

ケイの声が聞こえる……なんだろうか?

気付けば、先ほどまでの浮遊感が無くなつていた。いつの間にか到
着して いたらしい。

さつきは気付かなかつたけれど、心臓の鼓動の速さだつたり、落下
時の浮遊感だつたり、些細な現象に至るまでこのゲーム^{シャンフロ}は一線を画し
ている。

心を落ち着けてゆつくりと目を開けると、そこは洞窟のような場所だつた。湖も見えることを考えると、ここが涙光^目_的の地底湖なのだろう。

「大丈夫？ ペツパー」

「あ、ええ。大丈夫よ。心配かけたわね」

「いや、大丈夫ならよかつた」

「ありがとう」

「……」

「どうしたの？ ケイ」

「……これ」

そう言つてカツツオが挙げた腕の先には……

……

しつかりと、私の手が絡み付いていた。

「あっ、その、ご、ごめんなさい?!」

「いや、いいんだけど……ね。」

慌てて手を離すと、ケイは空いた手でインベントリを操作し始めて

……

「はい。これ、使つて」

私は一本の釣竿を手渡された。

「ええと、確か釣り中にたまに出現するモンスターの経験値が良い、だつたつけ？」

名前は「ライブスタイル・レイクサーペント」というらしい。この後、休憩中にW i k i も探してみたけれど、どこにも載つていなかつた。このユニークエリア（と呼ぶのが正しいのかしら？）にしか出現しないレアモンスターなのだろう。

「そうそう。前はサンラクと兎ちゃんと一緒に戦つてなんとか倒せたレベルだつたんだけどね」

「応薬剤師も魔法使い系列だから、多少の補助は出来ると思うけど

まだまだレベルは低いし、期待しないでね?」

「分かつて。倒し方はもう判つてるから、多分倒せると思うんだよね」

「それに、ペッパーには後々別のことも頼みたいし、ね」

釣りを始めて早一時間が経過していたが、地底湖は思ったよりも慌ただしくなっていた。

「はいシャケー！」

「こつちにちようだい！」

「よし、サーべント！」

「頑張つて！」

「シャケー！」

「こつちにちようだい！」

「やつば、ロブスター來たぞ！」

「……援護するわ！」

薬剤師の私に課せられた仕事、それはライブスタイル^{釣つた魚}を素材にアイテムを量産することだった。



釣竿を渡されたすぐ後のこと。

「頼みたいこと? というか、一人で倒せるのね。てつきりもつと強いモンスターなのかと」

「多分倒せる、って感じかな。ただ、もうひとつ上のレアモンスターのほうは、多分手伝つてもらうと思う」

「ただ、ペッパーにメインで頼みたいのはそつちじやなくてね」

これ。と今さつき釣り上げた魚を手渡される。モンスターではなくアイテムのようで、UIには「ライブスタイルドサーモン」と表示されていた。

「これは…回復アイテムかしら?」

「そう。前にここでレベリングした時も、かなり手に入つたんだけどね……薬剤師ならポーションか何かの材料に出来るんじやないかと思つてね」



ライブスタイル・デストロブスターと格闘するオイカツツオに、サーモンから作つた回復ポーションを投げつつ、「ファイアボール」での援護攻撃を行う。

と言つても、「初期 習得 魔法ファイアボール」はあくまで目潰しと搅乱。硬直の隙に前衛に移動し、剣を握る。

継ぎざまにスキル・スクリーピアスを発動し、ロブスターの甲殻の隙間を狙つて威力の強化された斬撃を打ち込む。

「カキンッ」

剣が弾く音が、ダメージの小ささを物語る。

それもそうだ。今の私のビルドはメイン生産職薬剤師のサブ初期職業剣士、それも早々にサブに切り替えてるので、剣士由来の攻撃スキルはさほど多くない。

でも、これで良い。

ロブスターのヘイトさえ奪えれば……

「サンキュー！ ペッパー！」

ロブスターのすぐそばまで移動したカツツオが拳を握り直す。

「赤、黒……足して緋色、混合拳気【火緋彩】！」

緋色を纏つた拳が、無警戒のロブスターの腹に突き刺さり、吹き飛ばされる。

一撃必殺とまでは行なかつたようだが、HPを大幅に削られたロブスターの怯みモーションを見逃す私たちではない。

「ペッパー！ 置み掛けるよ！」

「当然よ!!」

「お、 レベルアップ」

「おめでとう」

数分の後にロブスターは倒れ、経験値を得たカツツオのレベルが上がった。

「そつちの調子はどう？」

「順調よ」

生産職はアイテムの作成でも経験値が溜まる。

戦闘こそロブスターの援護しかしていないものの、それ以外の時間は魚を釣るか、魚からポーションを作成するを繰り返していたので、結構な経験値が溜まっていた。

「やつぱり、素材が潤沢にある、というのは良いわね」

「回復アイテムが潤沢にあると、効率も上がり、助かるよ」

釣れば捕れるサー^{無限}_{素材}モンとカツツオの格納鍵^{無限}_{インベントリ}、釣らなければモンスターの出てこない^{安全な}_底涙光^底の地^湖、生産を効率よく行うための条件が、今ここには揃つている。

何よりケイと一緒にいたりきりいられるという状況が、私のモチベーションを最高の状態に維持していた。

「あと、1つ良い誤算だったのは、この鮭ね」

「ライブスタイルサーモン?」

「ええ。まさかＨＰ回復ポーションだけでなく、ＭＰ回復ポーションも作れるとは思わなかつたわ」

全てのサーモンから作れる訳ではないけど、アイテム説明文の「その卵は優れた魔法触媒となる。」という表記を考えると、恐らく子持ち個体のみが素材にできるだろることは容易に推測できた。

ＭＰ回復ポーションがあれば、もつと周回効率は上がりそうだ。

生産数が限られるので、今はまだ節約している。

「説明文にも意味がある、って言うのも新鮮ね。格闘ゲームのキャラ説明なんて、大抵は簡単な性能の説明か、経歴と性格の描写程度だし」私がそう言うと、ケイは少し笑つてからそんなことはない、と私の意見を否定した。

「……」までフレーバーを深読みしなきやいけないゲームなんてシャンフロくらいだよ」

世界観の作り込みが恐ろしく深く、なおそれが破綻していないのがシャンフロなのだから。

とケイは補足した。

「一度休憩してから、また続きをやろうか」

「そうね。 そうしましょう」

気力とテンションは悪くなかったけれど、流石にお互いに集中力が落ちてきていたのが分かった。

それじゃあ一時間後に、またここで。

と、再開の予定だけ告げて、ケイがログアウトする。

……しかし、幾らなんでもポーションを作りすぎた気がするわね。



用意しておいたドリンクを飲みながら今日の行動^{データ}を振り返る。

ケイと手を繋げたことを思いだし、思考がホワイトアウトする。

……いや、私だってリアルでもVRでもケイと手を繋いだことはある。でもそれは、対戦後の握手だったり、仕事上の関係から来るもので、プライベートな握手とは言いたい。

そう考えると、理由はともかく手を繋げただけで一步前進だ。
生放送企画のおかげで、（物理的な距離はともかく）精神的な距離^{恋愛感情}はシルヴィアといーブン^{名前隠し}で、天音永遠よりも近いと分かっている。

イーブンつてことは、これから何をするかが重要なのよ。

今のところ、完全にプライベートで付き合えるゲームはシャンフロしかない。

だからこそ、大切にしていきたい。ケイと一緒に行動するためにも、自己分析は重要だ。

「そういえば、ほとんどケイが釣つてたわね……」

序盤こそ2人で釣りをしていたが、サーモンが貯まつてからはポーションを作り、MP回復しながら釣りをして、またポーションを作り、の繰り返しだった。

釣りをしていた時間と、そもそももの経験不足もあつて、サーモンの8割以上はケイが釣つていたようだ。

冷凍庫から冷凍食品を取り出して、レンジに入れる。

「釣りが趣味、なんて聞いたこと無いんだけどな……」

冷蔵庫からケチャップとマヨネーズ、香辛料を取り出す。

「でも、薬剤師の段階でもそれなりに支援できるつて分かつたのは僕偉ね」

ジョブの性質上、インベントリの容量と事前準備がかなり重要だと言うことは分かつていただけど、実際にケイと行動してみると、尚更それを実感できる。

「格納鍵インベントリア、やつぱり欲しいわね……」

温めたポテトを取り出す。

最悪廉価版でもいい。とにかく鍊金術師を目指す以上は、アイテムを無制限に収納できるアクセサリーの入手は必須だろう。

「ポーションはともかく、素材アイテムは腐っちゃうし……」

なにもつけずに、口に放り込む。

入手方法はまた今度調べておこう。

取り敢えず残ってるサーモンは全部ポーション化かな?

ポテトをつまんで、炭酸飲料を一口。

今ケイは何してるのかしら?

こういう時は特にシルヴィアを羨ましく思う。

もぐもぐ。

反対側が空いてないかの確認からね。

あと家賃。

忘れてはいけないけれど、あのマンションに住んでいるのは
魚臣^{日本一のゲーマー}慧^全とシルヴィア^{*}・ゴード^{ゲー}バーグ^マなのだ。

もぐもぐ。

家賃も相当な額の可能性がある。

「……無くなっちゃったわね」

新しい袋を取り出そうとしたところで、そろそろ良い時間になつていることに気付いた。

そろそろ再開の準備をしないと……

仕方ないので冷蔵庫にあつた、ハンバーガ店のお持ち帰りをつまみながら携帯端末を確認する。

……SNSに着信が来ていた。



サンラク：へい、カツツオ。なんかインベントリアに大量の魚があるんだけど、ついに魚類に改宗したのか？

鉛筆騎士王：あれ、ライブスタイルサーモンでしょ？別に良いけど、隠しエリアに行くならお姉さんに一言連絡は欲しかったなー？

サンラク：ん？……あー。あそこか。懐かしいな。

サンラク：それとポーションが増殖し続けてるんだがどうした？今度は生産職をサブにしたのか？

鉛筆騎士王：……はーん。

鉛筆騎士王：なるほどね。

鉛筆騎士王：ところで良ければなんだけど

鉛筆騎士王：そのポーション私に売ってくれないかな？友達価格で相場の2倍で買うよ？

サンラク：今度は何を企んでるんだ？

鉛筆騎士王：前に話したアレだよ、アレ。

サンラク：ああ、アレか。まあリソースは大切だよな。

鉛筆騎士王：結構大変なんだよ？今も生産職向けにプレイヤークラフト出したりしてさ

鉛筆騎士王：でもそのお陰で、ペッパー・カルダモンちゃんとか駆け出しの子も、たくさんポーションを納品してくれるの。お姉さん嬉しい限り！

サンラク：いや、何でそのペッパー？だけ名指しなんだよ。

鉛筆騎士王：話を戻すけど、そういうことだから溜め込んでるポーションをお姉さんに売つてくれないかなあ？

サンラク：無視ですかそうですか

鉛筆騎士王：そのお金で装備を買つてあげれば、喜んで貰えると思うよ？

サンラク：ん？

鉛筆騎士王：もしくは蛇の林檎でケーキを奢つてあげるのも良いんじゃないかな？

サンラク：ああ、そういうことか。

◇◇◇

「……はあ」

「どうしたの？カツツオ」

「あー、いや、大したことじやないんだけどね」

「大したことでも無いなら、なぜ何度もため息をつくのか。

「なによ」

「ペ……名前^{ノーネーム}隠^ヒしと顔^{ノーフェイス}隠^ヒしに、ここで稼いでるのがバレてね。少しからかわれただけだよ」

「ああ……」

以前見た、あの煽り合いを思い出す。つい表情に出ていたのか、カツツオが苦笑する。

「まあ、無断で使つてた訳だからね。仕方ないよ」

今の私たちがレベル上げに使える程度なら、彼らが使う必要も無いだろうし、大きな問題は無さそうなのだけれど。

「そう……ならいいけど」

単純にバレた相手が彼らであることが、ケイの悩みの種なんだろう。

……ああ、そういうえば

「あなたのインベントリアに保管して貰つてるポーションなのだけれど、良かつたらそのまま貰つてくれないかしら？」

カツツオの顔が、一瞬で驚愕のそれに変わった。これ、中々レアな

表情よね？

撮影アイテムを……と思う間もなく、カツツオはすぐに元の顔に戻つて訊き返してきた。

「ええと……どういうことだい？」

「いえ、私のインベントリには入りきらないし、今回の御礼と思って、ね？」

「御礼も何も、ポーション作成を提案したのは僕だし……」

「……」

「ダメだつたかしら？」

「いや、ありがたく貰つておくよ。ただ、代わりに……」

今度デザートでもこ馳走するよ

録音機を持つてないことを後悔した。

快速への憧れ

王国争乱イベント、この時点ではまだ公式未発表のイベントだつたが、有名配信者が新王政権派を宣言したり、あるプロゲーマーがそれに合流したり、という諸々の噂は知っていた。

安が悪いことも、風の噂で知っていた。

「ほい、二二二」セレビノ通常ハーリを避ける人が一定数出るのは当然で、その中に彼らのようなプレイヤーが居ることは今思えば容易に推測できることだつた。

……つまり、これは私の不手際とも言えるのだけれど、どうしても。

「あー、思いつきり走りてえー！」

「多分途中で転ぶよ？」

「分かつてゐる。言つてみたかつただけだつて」

雲上流縊の雲海地を踏破するために参加したの視聴者。パーティだつたのは誤算だつた。

「ペツパーさんは薬剤師なんですよね？回復任せても良いですか？」

ら、無茶はしないで欲しいわ」

「だつてよ、**桜蘭**」
ローラン

騎士に闘士と忍者（最近特に人気らしい）という、バランスの良さそうなパーティーに相乗りりさせて貰うまでは良かつたのだけれど、まさか全員がAGI偏重ビルトだとは気付けなかつた。

なおこの三人、シャンフロを始めてから偶然視聴仲間にあつたとのことで、別にリアルで知り合いとかではないらしい。

「ペッパーさん、レベルも高いですもんね。もしもの時はお願ひしますね」

「分かつたわ。サブに剣士を置いてるから、いくらかフオローもできると思うわ」

「俺たちはほぼ最短ルートだもんなー」

「ただでさえ平日は学校や仕事で進められないからな。なるべく急がないと、改崎さんに置いていかれる」

「日程はまだ分からぬけど、なるべく良い装備を準備しておきたいもんね」

「ここ、雲上流^{新大陸への港}編の雲海地は、シクセンベルトからテンバードへ抜け道であり、ファイフティニアまでの経路のひとつだ。

その大きな特徴と言えばやはり、地を覆う白い霧だろう。

地面が見えないほどの濃い霧は、私たちの腰元までを覆つており、迂闊に走ろうものなら、何に躊躇か分かつたものではない。

つまりここは、AGI^彼偏重ビル^らドとは微妙に相性が悪いエリアだと言うことだ。

「とは言え、ここまで霧が濃いとは思わなかつたわね」

ウイキを軽く流した程度だつたけれど、こんなことならこの前カツツオに聞いておけば良かつたかしらね。

「しかたないだろー。栄古斎衰の死火口湖はST^{サテ}—ライトが危ないつて言うし」

カツツオが向かうつて言つていた場所ね。確か……

「レイドモンスターが出るつて噂なんだよ。それにこの先の氣宇蒼大の天聖地はユニークモンスターがいなくなつて攻略難度が下がつてるらしいし……」

確かに、レベル上げやユニーク狙いでなければ、目に見える危険は避けた方が効率は良いでしようね。

「じゃあフオスフオシ工経由は？つて提案したら、ケイカが嫌だつて言うし？」

「だつて、そつちだとアンデッドと戦うことになるじゃない……」

たしかに、フオスフオシ工^{奥古来魂の渓谷}経由ルートは、ホラーに馴れない人には抵抗があるだろう。私もそうだし。

「ケイカさんつてホラーが苦手みたいだけれど、改崎さんがホラー

ゲームやつてる時はどうしてるの？」

「……部屋を明るくして画面から離れて観てる」

VRギアで見てるんじゃないの？と聞くと、そういう回だけは、携帯端末で視聴しているらしい。

「それ、明るくして離れたら画面ほど見えないんじゃね？」

「改崎さんの声を楽しむからいいのっ！」

ケイカと桜蘭の言い争いが始まる。とは言え（街中で見てきた限り）、すぐに落ち着く筈なので、ここは少し待つて……：

「ぎやつ?!」

ケイカではない。もつと低い声だ。そもそもケイカと桜蘭は言い争いの最中で、つまりこの叫び声は……

「!!どうしたST—ライト！」

「今！なんか！足に触つ……あつ、ひつかかれた！」

ST—ライトが足元に向けて片手斧を振り回すが、目えないモンスターに当たるかどうかは運次第だろう。

むしろ……

「まつてろ！すぐに行く！」

と意気込み、剣を抜いて駆け寄る桜蘭。いや、すぐにもなにも、数歩の距離でしようが。現在進行形でパーティー行動してるんだから。「どっこにいるの？全然見えないじゃない！」

ケイカも足元にクナイを振り始め、軽いパニックを起こしている。カツツオの対応力の高さを再認識しつつ、剣を抜いて、じつと霧の表面を睨む。

ここはパニックを静めるより、モンスターを抑えてしまった方が早い。

ケイカ達の起こす霧の波紋は少し邪魔だけれど、引っ搔いたのがあのモンスターだとすれば……

「あれね！」

真っ直ぐパーティに突進する霧の流れ！

スキル、スライドムーブでモンスターの直進ルートへ割り込み、同時に剣を地面に突き刺す！

「ボアアアアア！」

剣に何かが当たる衝撃と同時に、モンスターと思しき悲鳴が鳴り響く。

次の瞬間には、霧の流れが180度反転し……あ、これは逃げられたわね。

「え？ なに？ なに？」

依然パニック状態のケイカがこちらに駆け寄る。

寄つて来ない2人を確認すると、桜蘭はスタミナ切れ、パニックから落ち着いたのはSTM—ライトだけだと分かった。

「名前は忘れたけど、多分イノシシ型のモンスターね。逃げられちゃったわ」

モンスターが居なくなつたことを告げたことで、ケイカの表情が若干だか和らぐ。

「ああ、パニックになつてしまなかつた。どういうモンスターなんだ？」

「確かに、霧の中を突進移動するモンスターだつた筈よ。移動時は霧が押されて表面が流れるから、それで位置を見定めるしかないわね」「なるほど……」

「多分だけど、すれ違いざまに牙を引っ掛けられたのね。傷は大丈夫？」

?

「ああ、ほんと掠り傷だ」

ウインドウボーキョウを取りだそうとした

操作し始めた私に気付いたのか、STM—ライトがポー

ションは要らない、とジェスチャーする。

「詳しいですね、ペッパーさん」

ケイカも落ち着いて來たらしい。

桜蘭は……まだ息切れしてゐるわね。STM足りてないんじやないかしら？」

「ありがとう。と言つても、ウイキ情報だけどね」

「私たちも確認しようとしたんですけど、最近特に重くて……」

「ああ、なるほど……」

最近また重くなつたのよね。

「ペツパーつて結構いい回線使ってるんですね」

「あー、まあ、見たのも結構前だしね。お蔭で細かい情報までは思い出せないのだけれど」

噂によると新コンテンツ解放でデータが一気に増えたのも原因らしいけれど、ライブラリもよくあの重さのページを編集できるわね。「俺達もそうすれば良かつたんですけど、どうしても、直前にならないと調べる気にならなくて…」

「仕方ないって。あそこ重すぎなんだよ」

「画像表示切つても物凄く重いもんね」

「え？ 画像つて消せるのか？」

「「…は？」

「えつ？」

◇◇◇

その後、何度もモンスターに会いつつも、なんとか倒したり逃げたりしながら、私たちはエリアの8割ほどを進んでいた。

改めて実感したが、戦闘職全員AGI偏重というのはやはり厳しいものがある。特に本来タンクを担う筈の桜蘭のVITとがセオリーより低いのがかなり痛手で、想定内ではあるがポーションの消耗が激しい。

レベリングの時はポーションも潤沢にあり、カツツオ自身のプレイヤースキルもあってダメージ自体も少なかつたが、今回はそうもいかない。

視界と足場が比較的良好な神代の鐵遺跡では、足の速さと手数を生かしたヘイト分散総攻撃が上手く嵌まつたらしいのだが、視界の悪いここでそれをやると

「あつ」

「ケイカー！」

こんな感じに転げる。

「二人は攻撃続行！ 私がフオローするわ！」

「了解！」

「イエッサー！」

スライドムード、ジャストパリイを連続起動、ケイカを対象に飛んで来た氷弾を剣で弾き飛ばす。

「大丈夫?!」

「ありがとうございます！ペッパーさん！」

ケイカが立ち上がりつたのを確認して、私は全員をサポートできる位置まで後退する。

「やつぱり厄介ねこの霧……！」

さつきのも、別にわざわざスキルを二つも消費してパリイする必要は無かつた。アイテムを消費はするが、氷弾の着弾に合わせてブルズアイ・スローでポーキング^{置き回復}を投げれば、それで事足りていた。

むしろこの距離ならブルズアイ・スローも要らないくらいだ。

そう、霧さえ無ければ。

霧で隠れるのはモンスターだけではない。隠れてしまつたパーティーメンバーへの投擲は確率が大きく下がるし、ブルズアイ・スローも使えない。

「バオオオオオオオオオオ

ST—ライトの投げた斧が後ろ足に刺さり、クラウダイブ・エレファンントが悲鳴を上げる。

「喰らえっ！」

ST—ライトの方へ方向転換するエレファンントの脇腹に、今度は桜蘭が切りつける。

「よし、斧回収！」

「ほら象さん！こっちにもいるわよ！」

すかさず桜蘭に向かつたヘイトを、後方に回つたケイカがクナイによる連續切りで奪取する。

実を言うとクラウダイブ^{クラウダイブ}・エレファンント^{エレファン}とこのパーティの相性はそこまで悪くない。霧がなければ普通に優位レベルなんじやないだろうか？と思えるくらいだ。

クラウダイブ・エレファンント、リアエネミー故に、軽くWikiを流した私でも名前を憶えているそれは、最高速度はともかく、初速が

かなり遅い。

つまり、このパーティの主戦略たるヘイト分散総攻撃が、まあ結構刺さるのだ。

なので私の仕事は、さつきみたいなアクシデントのリカバリーと、
「S T — ライト！ 右後方から来るわよ！」

「了解！」

「ボアアアアアアアア!!」

S T — ライトが斧を右後方へ振り回すと、今度はイノシシの叫び声
がこだまする。

「あつーまた逃げた！」

「放つておいて、まずは象を倒すわよ！」

このイノシシの進路を予測してメンバーに伝えることだ。

そもそも、クラウダイブ・エレフアントは本来温厚なモンスターらしい。

距離を置いて移動すれば、まず襲われることもないとウイキにも
あつたし、私たちもそうしていた。

そこで出てくるのが、あのイノシシ型モンスターだ（流石に別個体
なのだろうけれど）。

あれがクラウダイブ・エレフアントに激突し、あろうことかこちら
へ方向転換して突っ込んできたのだ。

あとの経緯は言うまでもなく、アクティブ化したエレフアントとい
ノシシのM v Mに巻き込まれてしまつて今に至る、というわけだ。

「桜蘭！ スタミナ大丈夫?!」

「そろそろきつい！ 交代頼む！」

「「了解！」」

攻撃のメインをS T — ライトにスイッチしつつ、私は桜蘭に近い位
置へ移動し、サポート体制を整える。

「みんな！ 体力大丈夫?!」

「すみません！ お願ひします！」

今度こそブルズアイ・スロー起動。
スプラッシュユーポーションをケイカに向けて投擲する。

「ポーションの残数は……まだなんとかなるね」

薬剤師も忍者も、アイテム消費の激しいジョブだ。ケイカには（特に）丸太を温存するように言つてあるが、私もポーションの使用を最小限に留めていかないと、エリアバスで枯渇しかねない。

「うつしやあスタミナ回復うーーいつ倒してボスまで特攻じゃー！」

象よりもイノシシに苦戦した。

「……だつる」

「何してるのよ桜蘭、結局最後スタミナ切れじゃないの」

「仕方ねーだろ、ケイカ……騎士は装備重量もあって、走るとスタミナ消費が激しいんだよ……」

「それ込みでスタミナ管理しろつて話だろー」

「まあまあ。取り敢えずスタミナ回復させたら、先に進みましょー？」

「そうすね」

「そう言えばペツパーさん、体の使い方上手いですよね。他のゲームとかやられてるんですか？」

「ん、っ」

格ゲーを少々、なんて言つてしまふと、好きな格ゲープレイヤーは

?という流れになるのは目に見えている。

魚臣 慧^{N_u_2_m_e_g}なんて正直に言える筈がないし、最悪私の正体に辿り着かれかねない。

とは言え、嘘をつくのもちよつと……

あ、そうだ。

「いえ、(VRMMO系の)ゲームはこれが初めてよ。普段から(格ゲーのために)体を動かしているから、それで動かしやすいのかもしけないわね」

「へー、そうなんですね！私もなにか初めて見ようかなあ」

・・・人直伝、嘘ではない、結構便利かもしれないわね。
……

「スタミナ全快したぜ！」

「やつぱり霧が邪魔ですね。全力で走ると躊躇って転けそうになる」「でも走るけどな！」

「もろに受けるとダメージが洒落にならないからな。回避と攪乱に必須というか」

「この先がエリアバスで合つてますよね？」

「たぶんそうね」

「ボスはどんなモンスターなんですか？」

「ここ」のエリアバスは…」



その後、辛くもエリアバスを倒した私たちは、無事テンバード入りを果たしたあと、パーティーティーを解散した。

「今日はありがとうね」

「ペツパーさんはどうするんですか？」

「取り敢えず、道具屋でアイテムの補充と、この周辺の素材を採集するつもりよ」

「随分とポーションを使わせてしまいましたね」

「いいのよ。元から使うのは想定内だから」

「そうですか。また機会があればよろしくお願ひします」

「ええ。またね」

彼らはこのまま、ファイフティシアを目指すようだ。

……次に会うときは敵同士かしらね。

彼らには言っていないが、私はサードレマ派で彼らは新王派だ。
魚
臣
改崎速手慧

派閥争いの中で出会えば、戦わざるを得ないだろう。もちろん、負

けるつもりは微塵もないけれど。

……A G I 偏重ビルド増えそうだし、改崎速手対策も兼ねて、一応対応を練つておくかなあ……

そんなことを考えながら、私は道具屋の扉を叩い……

チリンチリン……

「あのフライドポテト、ピリピリして面白かつたねー」

ん?

「そうだなー。でも、シャンフロつて味覚制限あるはずだよな?他の料理は薄味だつたのに……」

「あー。言われてみれば、あのポテトだけちゃんとピリピリしてたね。なんでなんだろう?」

「不思議だよなー」

二人組を見送つて、道具屋の隣を見ると、そこはレストランになつていた。

「……そう言えば満腹度が減つてるわね」

チリンチリン……パタン

中毒になつた。

ゼンイチ一本勝負

♪♪

「ん？ 着信だ……メグから？」

「もしもし？」

「あ、ケイ？」

「どうしたのさ、こんな時間に」

「あ、あの、その、ね？」

「ケーイー！ ウタシ、hungryネ！」

「シ、シルヴィア?!」

「ケイ、どういうことよ！」

「あー、いや、これはその「Oh! メグ! こんばんわ!」

「シルヴィア、なんで貴方ケイと一緒に……」

「いや、シルヴィアがほつとくとジヤンクしか食べないから……」

「メグ! こんど hamburger 食べに行こ!」

「シルヴィア?! 話聞いてた?！」

「まあ、食べに行くのは構わないけど……」

「シルヴィア」

「What, s?」

「明日、ケイオースシティで合いましょう」

「……」

「OK」

「ちょっと待つて？ 何の話？」

「ケイは知らなくて良いわ」

「ええ……」

◇◇◇

ツー・ツー・

やつてしまつた。

これでは宣戦布告だ。

モグモグ……こここのボテトも悪くないわね。

強いて言えばもう少し塩気が欲しいところだけれど。

ケイに連絡することがあつたから掛けたのに、伝える前に切つてしまつた。

切つてすぐにまた掛けなおすのも忍びないし、シルヴィアと一緒にいる様を想像すると私の心も持たない。対した内容でもないし、代わりにメールで済ませてしまおう。

「それより問題は明日の対戦ね……」

負けるつもりは更々無いが、相手はシルヴィアだ。全米普通の戦い方研究と対策だけでは、万に一つも勝ち目はない。

ケイが成し遂げた前人未踏の勝利でさえ、顔隠しと名前隠し二人の協力者あつてのものだ。

……ん?

ここは塩気が強いわね。振り方が荒いのかしら……じゃなくて。「良いこと思い付いたかも」

◇◇◇

ピコン

「h m m?」

「シルヴィア、食べながら喋るのは……」

モグモグ……ゴクン

「m a i lがきてるワ……メグからネ」

「ん? メグからシルヴィアに?」

「A h……」

「どうかした?」

「ケイにも、m a i l送つた、だつテサ」

「ああ、……ほんとだ。ありがとう」

「さつきの電話の件かな?」

「m a y b e. A n d……」

「ん? まだなにがあつた?」

「T h i s c h i c k e n…テリヤキ? オイシイ!」

◇◇◇

「……できた」

この作戦なら、もしかしたらシルヴィアに勝てるかも知れない。
……完璧に作戦が成功したら、だけどね。

「このままじゃダメね」

中国拳法で更にパワーアップしたシルヴィアに、これまでの戦法が
どこまで通用するかは未知数だ。
ポテトを掴む手が空を切つた。
新しいのを出してこないと。

シルバージャンパー？ないわね。

あれは入念な準備あつてこそその作戦だし、恐らく今のシルヴィアには通用しない。

私はミーティアスに追い付けない。とすれば、やはり取るべきはアムドラヴァアだ。

「あとはユグドライアか……」

あら。チキンナゲットがあるわね。

ただ、同じカウンタータイプとして扱うにしても、ユグドライアは足が遅すぎる。それこそシルヴィアと戦うには致命的なほどに。

こんな時名前隠しがいればと、ポテトをつまみながらつい、あの邪悪な笑顔を思い出してしまう。

JGEでは一緒に仕事をしたけれど、未だに同一人物なのが信じられない。

そう言えば顔隠しは彼女さんとデートしてたつけ。羨ましい。当の本人はよく分からぬマスクを付けてたけど……顔を見せると死んでしまうのかしら？

「クロックファイアとカースドプリズンか……」

無い。はつきり言つて無い。

私にはあんな邪悪な所業はできないし、あんな動きもできない。
何より、ミーティアス相手ににカースドプリズンを出すなんて、残機が幾つあっても足りないだろう。
チキンナゲットも美味しかった。

◇◇◇

「ゾ」きげんよう。こんなところで会うなんて奇遇ね」

「奇遇？あなたが会いに来ただけでしょ？」

私は今、M_s・プレイ・デイスプレイと対峙していた。

「私も日を疑つたわよ？まさかクロツクファイアなんてね。

名前隠し

の影響？」

「あんなの真似したくないわよ」

そう言いながら、M_s・プレイ・デイスプレイの足元に仕掛けてい

た透明爆弾を起爆した。

◆◆◆

ピコン

「h m m?……」

着信音、メールね。

「シルヴィア、食べながら喋るのは……」

分かつてるわ。ケイ。

モグモグ……ゴクン

「m a i lがきてるワ……メグからネ」

さつきの電話の件かしらね。

Subject : about GH:C

翻訳機にかけるから日本語でいい、って言つてゐるのだけど。
やつぱり、明日の対戦の話ね。

Text :

S i l v i a,

I , l l w a i t i n t h e W _ d e l t a .

L o o k f o r w a r d t o i t !

p . s . T e l l K t o c h e c k h i s

m a i l .

「A h……」

「どうかした？」

「ケイにも、mail送った、だつテサ」

◇◇◇

立ち込めていた爆煙が、少しづつ風に流されて行く。

「要件を聞こうかしら？」

その言葉に振り替えると、いつの間にか背後に回っていたシルヴィアの姿があつた。

「……あのタイミングから避けれるの？ そのキヤラ^{ディスプレイ}で？」

「場所とタイミングが分かれば余裕でしょ？」

シーカータイプとは言え、Ms・プレイ・ディスプレイはそこまで足の速いキャラクターではなかつたと思うのだけれど？

「わざわざ対戦申し込むくらいだもの、何かあるんでしょう？」

「……」

「んー？ メグ？ もしかして昨日のはその場の勢い？」

「あー、もう、そうよ！ 悪い？」

貴方ばかりケイと一緒に少しイラついたのよ！

「いいえ。メグのそう言うとこ、私は好きよ」

Ms・プレイ・ディスプレイの画面が、笑顔のそれに切り替わる。

「特に無いのね？」

「いえ、折角だから決めましょう」

「そう？」

ディスプレイの顔が切り替わる。「なんでもいいよ。どうせ私が勝つから」という顔だ。

「……こうしましよう。私が勝つたら、一緒に料理教室に通いましょう」

「料理教室？」

「料理を憶えれば、ケイも少しは安心するでしょ」

それに

「私もケイに手料理を振る舞いたいし？」

「OK。メグが勝つたら、一緒に行つてあげる。その代わり、私が勝つたら……」

起爆。

ドンツつと言ふ音とともに、今度こそシルヴィアが

「メーネグー！」

「油断してはいけないよ！」

今のシルヴィアに空中シャンプはない!
宿を舞うディスプレイが何つかね、
爆

「どううあああ！」

これぞシンヤン

鍊金術師ジョブを目指してアイテムを投げ続けていたが、私は

擲スキルも上がっているのよ！

は

- ・可視爆弾は投げても見てから避けられる

不可視爆弾は投げると起爆タイミングが分からなくなる

そりやあ、あんなものを見たつ、ナ
名前隠し

るわよね。

次弾投擲！
起爆！投擲！

電磁誘爆は、電磁波を放出して周囲の機械を誘爆させる技だ。

流石にゲーム的配慮でDr.サンダルフォンの携帯端末などの装備機械は爆発しないが、設置アイテム扱いになるクロツクファイアの爆弾は爆発させることができる。

に足を着ける。

対策される前になるべく減らすつもりだつたのだが、想定が外れた。とは言え、不意打ちの攻撃も含めて、シルヴィアの残り体力はおそらく4割。トッピングを駒で運用して、やつてくれるじゃない」

トップデイスプレイを加味しても、悪くないダメージではある。
「やつてくれるじゃない」

「あら。私としては、あなた相手にここまで上手く行つたことの方があ
驚きなのだけど? やっぱりヒーローじゃないと気乗りしない?」
全米一 ミーティアス

「否定しないわ。でも、それは負ける理由にはならないわ」

シルヴィアがこちらに詰め寄るべく走り出す。

「こっち来ないと殴れないでしょ!」

「近づかないと殴れないと答える!」

中国拳法使いと至近距離? 冗談じやないわ。

「逃げるの? メグ!」

クロツクファイアの武器は至近距離じや使いにくいのよ!
爆弾



「見つけたよ! ミス・クロツクファイア!」

ドオオーン

爆弾と爆風の嵐を、シルバージャンパーが華麗に避けきる。

「どこを狙つているんだい?」

「だつたら避けないで貰えるかしらね?」

シーカータイプの中でも、情報収集に長けたM.s. プレイ・デイスプレイとは異なり、シルバージャンパーは移動能力、特に空中ジャンプに長けたキヤラクター。

「僕に簡単に攻撃が当たられると思つたら大間違いだよ」

加えて、ヴィランからヒーローになつたことで、シルヴィアのパンションが一段階上がつた。

「これならどうよ!」

ぬいぐるみを複数投擲!

さらに回避先に不可視の爆弾を投擲!

「それじゃあ軌道が見え見えだよ!」

避けられてしまつた可視爆弾を視界に入れて起爆……よし。狙いどおりの方向に避けた!

視界に入れて……今だ!
起爆

「なつ……」

ジャストタイミングで起爆した筈の爆炎は、それでもシルヴィアに

は届かない。

起爆の瞬間にステップを刻まれる。

「ノンノン。起爆タイミングさえ分かれば避けるのは簡単だよ?」

見えない攻撃の位置とタイミングを、私の目線の動きだけで把握し

たっていいうの?!

「今度は逃げても無駄だよ?」

「分かつてわよ!!」

これは逃走ではなく、そう、戦略!

「何か言い残すことは?」

一瞬で捕まつた。

シルバージャンパーの腕が、クロツクファイアの襟元を掴み、持ち上げる。

「そうね……」

項垂れるように地面へ顔を向けて、辞世の句を……

言う前に起爆!

「ちよつ、メグ!?

至近距離での爆破にさしものシルヴィアもその手を緩め、私は吹き飛ばされた。

クロツクファイアの残り体力が3割を切つた。シルバージャンパーは8割以上残っているかしら?

実質捨てゴマ運用とはいえ、M.s.プレイ・ディスプレイを落とせただから、クロツクファイアはよくやつた方だと思う。

「今のは効いたんじゃないのかしら?!」

硬直から復帰し、立ち込める爆煙の先にいるであろうシルヴィアに問い合わせる。

「あら、やつぱりそつちにいたのね」

次の瞬間、霧を搔き分け出現したシルバージャンパーの脚が一クラックファイアの胸を打ち据え……

シルバージャンパーのゲージ技「銀の足」は走力と跳躍力、そしてキックの威力を増大させる。シルヴィア本人の格闘術によつて繰り出されるそれは、私を硬直させるに足る威力を持ち、それは同時にデコイ爆弾デコイジ技を起爆するのに十分な威力を持つことを意味する。

爆音とともに、クロツクファイアのHPは尽きた。私

◇◇◇

「ここは俺に任せな！」

「あ、ありがとうございます」

アムドラヴァヒーが突如現れた恐竜元トカゲをその熱腕で吹き飛ばす。

W△限定の敵性NPC「再古代」レブディノス。その特徴は街中に屹立する牙の塔と、予兆なくどこにでも現れる恐竜型エネミーだ。

W△ではこの第三勢力の撃破でヒーロー・ヴィラン問わずゲージが溜まる。そして市民を救出する場面であれば、更にヒロイックゲージを稼ぐことができる。

「まあ、あつちもゲージ溜めてるんでしようけどね」

取り敢えずこの元トカゲは倒して……おっと

「来たなシルバル」

「あんたが中々来ないから、こっちから来てやつたんだよ」

「そりやほとんど動いてねえからな。遠かつたろ？」

W△ルールでは3つのうち、K.O.された場所からもつとも遠い

開始地点からの引継ぎとなる。

シルヴィアの残り体力は……6割。

「それはそうと、久しぶりだね。アムドラヴァ」

今までアムドラヴァが議論の中心だった対シルヴィア対策は、そのほとんどがシルバージャンパーとカースドブリズンで埋め尽くされた。

「G_H^{バースト}以来になるのかしらね？まあ、今あなたはシルバージャ

ンパーだけど

「だとしても、やることは変わらないよ」

先手を取り、最短距離で蹴り込んできたシルバルジヤンパーの攻撃を腕でガード……フェイントか！

視界右隅に消えた白銀の上着を追うように腕を振り回す。

いない。

……上？

考全戦全敗の経験る前にこれまでの積み重ねが、天啓をもたらす。

反射的に上方をガードした左腕に白銀の脚が突き刺さり、お互いの体力が僅かに削れる。

「あら、残念」

シルヴィアが宙を蹴り、私の真後ろに着地する。反転では間に合わない。右旋回に併せて右手を最速で伸ばして、ガードを……

シルヴィアが？ 着地点に留まる？ あのシルヴィアが？

一瞬浮かんだ疑問。

微かに聞こえた地を踏みしめる音。

アムドラヴァアが放つ熱気が揺らぐ感覺。

視界の左側に白銀が見えた気がした。

動き始めてしまった上半身の旋回そのままに、自由な両の脚が、右へ一步ステップを踏む。

上下あべこべな動きでバランスを崩したアムドラヴァアを、シルヴィアが見落とす筈もなく。

「ぐつ……ああ！」

崩れた体幹では銀の脚を受けきるには程遠く、ビルの壁を突き破り吹き飛ばされる。

硬直は……無い。

シルヴィアを警戒しつつ、瓦礫で溶鉄弾を補充する。どうせ当たりはしないだろうが、無いよりはよほど良い。

「仕切り直しと行こうぜ。シルバーヴィヤンパー」

「そうだな……折角の天氣だ。外でお茶でもどうだい？」

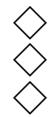
「けつ……男に言うセリフじやあねえな」

「ははつ。ごもつとも」

シルバージャンパーが跳躍し、アムドラヴァが構えるのと同時、そいつが咆哮を上げた。

「キュアアアアグアオアアアア」

再古代はいつだつて唐突に現れる。



「……」

体力、残り3割。

結果だけみれば、アムドラヴァはシルバージャンパーを倒した。ただし、体力の半分以上を失つて、6割を削るのに7割、タフネスの差も加味すれば、恐らく1・5倍かそれ以上のダメージを受けている。

W △ なら、ミーティアスでないシルヴィアなら、余りにもか細い糸と知りながら、どうにかなるんじやないかと期待していたことを後悔する。

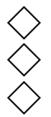
そもそもクロツクファイアが自爆込みで4割しか削れなかつたのが……止めておこう。

まだ勝負は終わっていない。

「キュアアアア……」

「引っ搔き回してくれてありがとう、恐竜さん

このクソトカゲ



「やあ、久しぶりだねアムドラヴァ」

そして純白の戦士は降り立つた。

ヒーロー

「さつきぶり、の間違いじゃないかしら？」

そうでしょ？ シルヴィア

……ここからが本当の勝負だ。

「キュオオオアアアアア」

おつと、もう一人いたわね。

シルヴィア^{ミーティアス}が来たとき、私は丁度ターゲットエネミーをとの交戦中だつた。

そして彼女が降り立つた瞬間、再古代のヘイトがアムドラヴァ^私からミーティアスに移つたのを、私は確かに視た。

ターゲットエネミーのヘイトは、他のターゲットの討伐数に大きく影響される。

つまりシルヴィアにとつてこいつは2体目。^{H P回復}交代直後のミーティアスには旨味がない。

だから、

「あんたにやるよ。ミーティアス」

旨味のほとんど無い第三者^{レブディノス}と、痛手を追い逃走を始めたアムドラヴァ^{相手}、どちらを優先するかなんて火を見るよりも明らかだ。だがそれでも、

「さて、蛇もどき、街をメチャクチャにした罪は償つて貰うよ？」
真性のヒーローはヴィランを無視できない。

◇◇◇

ミーティアスが跳躍する、脚に蒼い粒子が収束しその輝きを増すのが見える。

体は完全に硬直している。

「また会うときを楽しみにしているよ」

そして

アムドラヴァの体内から光が溢れ出た。

『カウンター戦術は、変化し続けるリズムに対応し切れなくなり、いざ
れコンボを喰らう。』

こうしてミーティアス対アムドラヴァは、顔隠しがGGCで推論し
ていた通りの結果に終わった。

◇◇◇

女の子を見つけたので拉致する。ヴィラニックゲージが溜まる。

「さあミーティアス、早く来ないとこの子がどうなつても知らないわ
よ……！」

僅かに残っていた市民がパニックを起こす。報道ヘリの音が近い。
「うるさいわね」

すぐ側にあつた瓦礫を持ち上げ、投擲。

尾翼を損傷したヘリコプターが視界の外へと消える。爆発音とともにヴィラニックゲージが溜ましたが、たぶんきつとおそらく関係ないことだろう。

その時、シャラシャラという馴染みのある音が聞こえた。

「ああ、折角騒音が止んだと思ったのに」

「その子を離して貰おうか」

「嫌。これは私のものよ？」

「そう。それなら『いいえ。やつぱりやめておくわ』

拉致していた女の子を丁重に地面へ降ろし、

「……良かつたわねえ」

「ひつ……うわあああんんん……」

ニタリ、と笑うと女の子は泣きながら逃げていった。

「随分と、^{ユグ}ドライア^Rの演技が上手くなつてゐるじゃない。GGCじやあん
なだつたのに」

「仕方なく、そう。仕方なくよ」

思い入れのあるキヤラつて訳ではないのよ？ ただ、あの日以降よく
使うから慣れてしまつたというだけ。

イベントでGHCをやると、なぜか必ず一人はユグドライア（しかもなりきりR^{ロールプレイ}P込み）を指名してくるのよ。

つと、そんなことを考えている場合ではなかつた。

既にミーティアスが跳躍している。

「ああ、そうだ。メグ、1ついいかしら？」

ミーティアスの初撃を薦^{触手}でガードする。アムドラヴァアとは違い、防戦一方ではミーティアスの体力は削れない。

「こんな時に何かしら？」

罠種子^{ラップシード}起動。死角から伸びる薦が、コンクリートを打ち破りミーティアスに……当たらない。

「私が勝つた場合の報酬、まだ決めてないでしょ？」

「それ本当に今必要な話!?」

ミーティアスが宙を蹴り、ピンボールの如く加速を始める。

「先に決めておかないと不公平でしょ?」

歪んだ標識を踏みしめ、跳躍。

「いい?」

ビルの窓枠を踏んで更に加速。

「私が勝つたら」

そして罠種子^{ラップシード}で宙に浮き上がつていた瓦礫を踏み

「ハンバグはうあ！」

爆発。

「隙ありつ！」

自前の触手で攻撃！攻撃！攻撃！

罠種子^{ラップシード}で追撃！

さらにゲージ技！^{範囲攻撃}

硬直から復帰したミーティアスの取った行動は上空への跳躍。

「なつ……」

突如頭上から襲いかかってくる薦を、それでもすんでのところで回避する。

「メグ、一体何を……いえ。瓦礫に罠種子^{ラップシード}を付けて投げたのね？ イカ

れてるわ

「それを避けるあなたも大概よ?」

「問題はその前の爆発……」

「そうだ、シルヴィア」

「なに?」

「あなたが勝つたときは、何をすればいいの?さつきはよく聞こえなかつたのよ」

「ハンバーガー」

ん?今なんて?

「ハンバーガー、今度奢つて貰おうと……そつか」

「ハンバーガー……つて、それだけで「クロツクファイアね?」

ん、つつ

「そう、そうよね。ダストの銃と弾丸が持ち越せるなら、クロツクファ

イアの爆弾もできるわよね」

速すぎて当たらない?当たつてもスタンまで持つていけない?
ならシルヴィア自身が攻撃に当たりに行けばいい。

「そのために、アムドラヴァは^{逃走}移動していた」

手品の種はバレてしまつたが、同じ種でも買種子の残弾はあるし、

顔隠し曰く

『多数の選択肢を提示すれば、相手の思考を縛れる』

らしい。

所在不明の爆弾がここには散らばつているとシルヴィアは気付いた。

普通に走るだけならともかく、ミーティアス特有の人力ピンボール

を耐えられるほど爆弾は頑丈ではない。

駆ければ駆けるほど、起爆率は上がり、自らの足が起爆剤であるが故に、避けることは敵わない。

その対策か、数歩早く攻撃に転じたミーティアスに^{カウンター}擁^ギ払いを敢行

する。

「おつと」

空中ジャンプで躱されたが、確信した。

このミーティアスになら大技も当たられる。

「飛べない鳥の気分はどうかしら?」

シルヴィアが着地する瞬間、罠種子トラップシードを起動する。が、これも不発に終わる。

「だれが跳べないって?」

そして、ミーティアスが始動する。

地面を蹴り一歩。

消える寸前の罠種子トラップシードを踏み、二歩。

ビルの側面にて三歩。

空中に四歩目、五歩、六歩……

ちがう!これは
「スター^ゲロード!」
技

「これなら足場なんて関係ないわ」

ミーティアスのスター^ゲロードは、発動から五秒間無制限に空中を歩行……否、飛び回る。

「ぐつ」

対応が追い付かない……!

「ほらほら!メグ!もうネタ切れかしら?!」

連撃をうけて、一瞬の硬直がユグドライアの体を襲う。
通常ならシルヴィアはこの隙を見逃さない……が、

「生憎ゲージが足りなくてねつ!」

「あら、超必殺はなし?」
シルヴィアはなお通常攻撃を選ぶ。なぜなら
「生憎ゲージが足りなくてねつ!」

アムドラヴァアが爆散してから、まだ数分と経っていないのだから。

よし、硬直が解けた。

すかさず瓦礫を数個投げつけるが……

「そこ」にあつたのね！・これで2個目！」

全て避けられた上に、爆弾付きの瓦礫を看破される。

「いや、なんで分かるのよ？！」

「んー、ナイショ？」

スターロードの効果時間残り1秒未満というところで、再び硬直を受ける。

が、先ほどとは違う。

硬直から数度の通常攻撃の後、シルヴィアス^{ミーティアス}が跳躍し、その足に蒼の粒子を宿す。

「さつきは悪かつたね。今度こそ超必殺だ」

まだだ、まだだ！

このタイミングなら、ミーティア・ストライクが当たる直前に硬直は解ける！

今の状態は、奇しくも顔隠^{ノーフェイス}しと同じ状態とも言える。

動けるが、避けられない。

なれば、対処もまた顔隠^{ノーフェイス}しと同じであるべきだろう。

直前で硬直の解けた薦を最速最高効率で動かし、体の下に隠しておいたへそくりを、ミーティア・ストライクの経路上へ放り投げ、瞬間、ミーティアスの右足が爆ぜた。

「はははっ！・ミーティア・ストライク破れたり！！！」

蒼き閃光と爆発がユグドライアを……襲わない。

代わりにクロツクファイアの爆弾によるダメージを受けるが……これは必要経費だ。

「今のでもうゲージも無いでしょう？空中^{スターロード}跳躍もできないわよ！」



翌日、私はシルヴィアにハンバーガーを奢っていた。

「……で、なんで分かつたのよ？」

ポテトを頬張りながら訊ねる。

「b o m bあるとき、少しヤサシク？投げてるでしょ？」

「そつちじやなくて、最後のよ」

「サイゴ？」

「最後、爆弾の位置全部把握してたでしょ」

そう、ミーティア・ストライクを封じて、少しだけ、ほんの少しだけ慢心した私を襲つたのは、空中跳躍無しでの高速多段跳躍だつた。

「あー、アレ」

あつ、それ私のポテト……

「見えなくとも、ふんだらワカルよ」

私のポテトを摘まみながら、シルヴィアが答える。ああ、こここの特製ソースは美味しいのよ。付けてみなさい。

「いや、踏んだら爆発するでしょうが」

「だから、b o m bしない speedでふみ……マクッて？場所覚えたの」

あー、途中まで少し遅めだったのはそういう……化け物かな？
化け物だつたわ。

でもまあ

「次は負けないわよ。シルヴィア」

「んふふ。楽しみに待つてるよ」

あ、店員さん！ポテト追加で！

……いや、違うのよ？彼女も食べるから追加注文を、ね？

「そうだ、ここソースがもう1種類あるのよ。試してみる？」

「イイね！サンキュー、メグ！」

たまにはポテトをシェアするのも、悪くないと思った。

神話の森と林檎のケーキ

『「鍊成士」への転職が可能になりました。転職しますか？　はい、いいえ』

躊躇わざ、『はい』^{転職}を選択する。

「おめでとう、ペツパーくん」

その言葉に振り向けば、そこにいたのはラック・ピニオン——以前サードレマでプレイヤークエストを教えてくれた鍊金術師だ。

「あなた、どこにでもいるのね……」

「いやいや、ただの偶然だよ。ちよつとこの街に用があつてね」

「なにはともあれ、鍊成士転職おめでとう」

「どうも」

正直、そこまで言われるほどの内容でもない。鍊成士への転職は、薬剤士として一定の経験^{生産数}を積んだあとに受注できる『転職クエスト』をクリアすることが条件だ。

必要なアイテムや手順^{答え}は一通りウイキで確認できるので悩むようなものでもないし、受注条件^{アイテム生産数}はケイとのレベルイング中に達成していった。シクセンベルトの時点でも転職可能だつたのよ。ただレベルイングの余韻に浸つて忘れていたというだけで。

「次は遂に『鍊金術師』だね。……と言いたい所なんだけど、ここで重要な事実が一つある」

耳寄りな情報ではなく、重要な事実。恐らく余程のことなのだろう。

表情に出ていたのか、ラック・ピニオンは私に問うまでもなく話を続ける。

「鍊金術師の転職クエストを受けるには、特定のアイテムを複数個、複数種類作らないといけないのは知ってるね？」

「ええ、調べてあるわ」

「じゃあ、『ハイエスト・ポーション』も知っているね？」

それについても、ウイキで調査済みよ。

「ハイグレードの回復ポーションね。メイン素材は神話の大森林のレ

アモンスター、アセンション・ホーンの聖角^{前の角}

「そこまで分かつてゐなら話が早い」

「どうぞ？」

「单刀直入に言うと、その前の角^{レアアイテム}が品薄、というかほぼ品切れなのさ」「品切れ……ってどういうこと？」

アセンション・ホーンの聖角（前）は、高額で取引されるが故に、絶対数は少ないものの、常に一定数の流通が確保されているアイテムだと聞いていたのだけれど。

可能性があるとすれば、

「もしかして、神話の大森林で何かあつたの？」

ラック・ピニオンが頷く。

「どうやらレイドモンスターが出るみたいなんだ。森に入ったNPCや、プレイヤーの行方不明、プレイヤーだとリストボーン。それが相次いでいる」

なるほど。

「それで角狩りする人が減つてゐるのね？」

「立ち入り禁止ではないんだけどね。いずれにしてもそういう事情だから、落ち着くまで待つか、相当な出費を覚悟した方がいい」

「覚えておくわ」

「個人的には、大枚を叩いてでも素材は買った方が良い、と助言しておこう。レイドモンスターはいつ討伐されるか分かつたものじゃないし、ハイエスト・ポーション自体も品薄で高騰しているから元は取れるはずさ。因みに僕達は、高騰後の価格にさらに割増で買い取つてからよしなに」

商売上手ね。

とはいゝ、アセンション・ホーンを買う元手も、プレイヤークエストで稼ぐのが一番高効率なことも事実。彼らにはもう暫くお世話になりそうだわ。

「ハグルマン、そろそろ行くか？」

「ああ、そうしようか」

ラック・ピニオンが返事をする。

振り向けば、二人のプレイヤーが立っていた。いざれも装飾に赤い鉛筆の紋章があり、R P Aの一員だと分かつた。

「……ああ、ハグルマンってのはあだ名だよ。ピニオンの名前はラック・車のアンド・ピニオ前ンから取つてるから」

頭に疑問符の浮かんだ私を見兼ねてか、「死皇コショウ」というプレイヤーが補足する。

「ペツパー・カルダモンさんだね？ピニオンから聞いて、少し気になつていたんだ。ほら、胡椒コショウと胡椒ペッパだろ？少し他人事とは思えなくてね」

「行くんじやなかつたのか？コショウ」

「あー。そうだな。じゃあ最後に1つだけ」

「なにかしら？」

「アセンション・ホーンの聖角前角を買うならファイフティシアがオススメだ」

それじゃあ、また。と去つていく3人組を見送り、私も出発の準備を始めた。



「あ、ー。眠い」

騎士装の女性が唸る。

「ニンフエアさん、大丈夫ですか？」

「い、やあ、一昨日から生放送見てたからほとんど寝でな、くて……」

それを聞いた雛羽柔ひなわじゅうが彼女を一瞥して失笑する。

「自業自得だな」

「眠くともちゃんとタンクするから凄いよな」
聖騎士に戦タンク長長に戰巧者距離（弓使離）、僧兵と、後方支援として呪術師デバッファーと鍊成士わたくし。

今回は完全野良パーティーへの参加になつたが、中々バランスの良いチーム構成になつたと思う。

「こんな面白いなら、もっと早くに始めておけば良かつたなあ」

氣宇蒼大の天聖地の山の中腹まで来たところでぽつりと、僧兵のM I Z U K Iミズukiが呟く。

聞けば好きなモデルがやつていると知つて、前々からやろうか決め

あぐめていたらしい。

「結局、どうしても気になつて洋服代を我慢して買っちゃつたんですね。で、始めてみたらびつくりで。中々センス良い服も並んでて……」

「……」

「……で、そこで永遠様が……」

「……この衣装とかコーデが永遠様っぽくて……」

「……なんでも永遠様そつくりのプレイヤーが……」

聞いてしまつたのが運の尽きで、そこから山頂までほとんど天音永遠語りが続いた。

要約すると、彼女はゲーム内ファッショ武器代の節約ンのために格闘職に転職したとのことらしい。

「……なんでモンスターがいるんだ？」

「事前情報だと、ここはモンスターが出ないって話だつたよな？」

氣宇蒼大の天聖地の山頂は、本来モンスターが発生しないと言っていた場所。雛羽柔と音々ネオンの疑問ももつともなのだけれど、

「もしかしてアレじゃないですか？ ほら、なんとかジークつていう

「あ、ー。ジークバルム、でしたつけ」

「そうそう、それです。それですよ。確かJGEに永遠様を見に行つたときに、中継であつたんですよ。こう、すつづく大きい金色のドラゴンが！」

あれは憶えている。中継でもかなり大きかつたから、現地では相当な大きさだったのだと思う。

「それなら知つてる。確かにユニークモンスターだよな？ 随分前に倒された」

「それが何だつて言うんだよ？」

「確か、ジークバルム？ がよく来るんですよ。休息のために、だつたかな？ それで、そのジークさんつてものすごい強いらしくて、なんでも、新大陸？ 海の向こうにあるユニオン？ ちがうか。とにかく海岸沿いに街があつて、それを吹き飛ばせるくらい強いんだとか、それで……」

「要約すると、ここは元々、そのユニークモンスターが根城にしてた場所なのよ。だからモンスターが寄り付かなくて安全地帯になつてたらしいの」

MIZUKIの話が逸れていくのでざつくりとウイキに書かれていた内容を要約する。

「つまりなにか？そのジークバルムが倒されたから、モンスターが出現するようになつたってことか？」

「ま、あ、…そういう事だと思います……」

「そういうことなら、何も気にすることあねえな。全部射ぬきやいいだけだ」



「マスター、フルーツケーキを一つ。あと個室は使える？」

「畏まりました。お部屋は右手奥をどうぞ」

部屋は存外広く、2人で使うには些か広すぎるようにも感じた。

お互いに譲り合いながら対面に座ると、カツツオ^ケが会話を始める。

「ドリンクは何がいい？メグ」

「急に呼び出してどうしたのよ。あ、コーラつてある？」

「コーラね。了解」

「さつきも話したけど、この前のお礼だよ。^{ポーション}数も相まって、かなりの額になつたからね」

「それは良かつたわ」

ケイが注文のために扉へ向かい、店員を呼び出す。

技術レベルが中世に設定されているためか、直通電話なんて便利なもののは無いみたいだ。

蛇の林檎、フォルティアン支店。私も入るのは始めてだけれど、路地裏の奥まつた場所にある場末な酒場、という印象を受ける。そもそも他の飲食店にもほとんど入らないので、ウイキ以上の情報は分からぬし、さほど重要ではないので調べてもいない。

「さつきも聞いたけど、なんで私がコ_コにいるって知つてたの？」

カツツオからメールが届いたのは、フォルティアンに着いて、パーティを解散したすぐ後の事だつた。ファーフティシアまで弾丸する案もあつたのだが、M_{天音}I_{永遠}Z_{出番}U_{演組}K_{予定}I_{予定}と雛羽柔の予定が被つたために、解散せざるをえない状況もあり、二つ返事でカツツオが来るまで待つていたのだ。

「あれはペンシルゴン……いや、個室_{ココ}なら気にしなくていいか。メグがココにいるのは名前隠_{脅迫}しながら教えて貰つたんだ。いい加減お返ししろつて助言_{脅迫}と一緒に、ね」

踏破済みエリアとはいえ、このためにケイは街を少なくとも1つは移動している。それはつまり、名前隠しがケイに助言したタイミングでは、私はまだフォルティアンに到着していなかつた、ということなのだ。

そもそも私は名前隠_{ノーネーム}しに進行ルートは話していないわけで、彼女は私の進行ルートを予測した上で、フォルティアン到着直後にメールが到着するよう、ケイに連絡したわけだ。

何かカラクリがあるのだとは思うが、考え付くより先に飲み物とケーキが来てしまつた。

「まあ、取り敢えずは食べながら話そうか」

「……ええ。そうしましよう」

「格ゲー以外は初つて話だつたけど、楽しめてるかい？」

「予定より少し遅れたけど、鍊成士に転職したわ。それと、私自身も投擲が上手くなつて……」

ふと、気付く。

個室で二人きりで会話しながらスイーツを嗜む、これは俗に言うデートと呼称されるイベントなのでは?

レベリングの時も二人きりではあつたけれど、あれはどちらかといふと、作業的な意味合いが強かつた。それに比べて今は、お返しと言

うプライベートな時間。

これはもはや、間違いなく、デー……

「メグ？ 大丈夫かい？」

現実に視線を戻せば女性姿のケイが心配そうにこちらを見つめていた。決して見覚えがあると言つてはいけない。

「え、ああ。ちょっと考え事を、ね」

「楽しめてるわよ。それに、格ゲーにも応用できる部分があつて新鮮な気分だわ」

「それはよかつた」

ケイからケーキを1切れ渡される。

スポンジの微かな弾力を感じながらもすっとケーキに沈んでいくフォーマークの感触が、シャンフロがシャンフロたる所以を私の右手に刻みつけてくる。

「相変わらず、凄い感触再現よね。前にフライドポテトみたいな料理があつたから食べてみたけれど、食感そのまま驚いたわ」

「シャンフロでもポテトなんだね……」

妙に納得したような顔のケイからは、同時に諦めのよう、哀愁のような感情が漂つているように、私には感じた。

「何よ？ 悪いかしら？」

「いや、そういう意味では……」

「まあ、再現されてたのは食感だけで、味は凄く薄かつたけど……甘い……」

甘い。口に入れたケーキが甘い。

「ねえ、ケイ？」

「ん？ メグ、どうかした？」

先ほどまでの雰囲気はどこへやら。一変して笑みを溢すケイが比較的の平静のままよりも、アバターでそう返してくる。

『称号【美食舌】を獲得しました。』

『このケーキ、甘いわね』

「そうだね」

【美食舌】を獲得したわ

「それはおめでとう」

「ケイ、あなた知つてたわね？」

「もちろん。だから『蛇の林檎』にしたんだ」

堪えきれなくなつたケイの顔が崩れるように笑みに変わる。

「かなり大雑把ではあるけど、ちゃんと甘さがあつて美味しいだろ？」

「そうね。ちゃんと甘いってなんか新鮮ね」

今まで食べてきたものに比べれば、確かにこれは美味しいケーキよね。味が薄すぎてゴムとか綿を食べてると変わらなかつたし。……いや、ゴムを食べたことはないけどね？

ああ、でも

「あのポテトは美味しかつたわね」

なによ。そんな顔しなくても良いじゃないの。

「スペイスの良く効いたフライドポテトが街のレストランにあつたのよ」

あれ？と、ケイが首を捻る。

「メグは今【美食舌】を獲つたんだよね？」

「そうよ？私も味覚制限があるのにおかしいな。つて思つてね。ログ

アウト後に調べたら、調味料スペイスじゃなくて麻痺毒だつたらしいのよ

「……毒による刺激なら、【美食舌】関係なく感じることができる。つてことか」

「そういうことみたい」

「食事中に戦闘と同じ処理が入るのか……」

「少量なら刺激だけでHPは減らないから美味しく食べれるわ。でも食べ続けると中毒状態異常になつて、スリップダメージが発生するのよね」「主食にはできないわけだ」

「残念ながら、ね」

また微妙な顔をされた。



シルヴィアもしそうだが、メグのジヤンク揚げた芋中心の食生活は眼に余るものがある。とはいへ、ここはシャンフロV R M M Oで、いくら食べても現実の肉

体に影響が出るわけではない。

そう考えた魚臣慧は「そういうことなら」と席を立つ。

「どうしたのよ？ 急に」

「折角だから他にも何か食べようと思つてね」

扉を開け、ちようど近くにいたウェイターに声をかける。

「どうされましたか？」

「追加注文を」

「かしこまりました。……もしよければ、あちらもご利用下さい」と、ウェイターがペッパーのいる個室の中を指し示す。

その先の部屋の壁にベルと紐を見つけて、カツツオは苦笑してしまつた。

あんなベル、今まであつたつけ？

「気付かなかつたよ。ありがとう。次からはアレを鳴らせばいいんだな」

取り敢えず、フライドポテトを山盛りで。それから、チキンナゲットを1皿……あ、いえ、チキンは大盛りじやなくていいです。普通サイズで。

「メグのことだから問題ないとは思うけど、鍊金術師にはなれそ.ua
い？」

「もちろん。チャートはもう用意して……あ。」

「どうかした？」

「いえ、ちょっと問題があつたことを思い出してね。神話の大森林は知つてるわよね？」

「もちろん知つてるよ。そこが何か？」

「そこに出現するアセンション・ホーンの素材が欲しいのだけど、品薄で価格が高騰してるのよ」

メグがケーキを一口頬張り、続けてコーラを一口。……どうやら、コーラの甘さにも気づいたみたいだ。

「へえ、それはまた厄介だね」

だが、外道相手ならともかく、メグを相手に終わつた話題でおちよ
くるほど自分はひねくれてはいない。と魚臣慧は自負していた。

「これがまた、レイド関連らしくてね」

ここで料理^{シャンクフード}が到着。露骨にメグの眼が輝いている。

取り敢えずフライドポテトはメグにの前に並べ、チキンナゲットを

一口。

「神話^{王都}の大森林^隣のレイドモンスターか」

ベンシルゴンから軽く聞いた記憶はあるけど、まあ今は挑戦しない
方がいいだろう。新王政権側への脅威を取り除く行為をあの魔王が
是とするとは思えない。

「要するに、レイドモンスターにやられて聖角が集められないわけだ」
「そういうことね。それ以上は噂に聞いただけだから詳細は分からな
いわよ……ただ、かなり苦戦しているみたいね」

お、フライドポテトを食べた。やっぱりさつき^{ケイ}よりも良い顔して
るよ。

そう思ううちに、メグの手は次のポテトへと伸びていく。



「ふおういえは」

ケイにが少し怪訝な顔をするので、急いでポテトを飲み込む。塩味
の効いた良いポテトだ。

最近ケイが食事中のマナーに厳しい。……特に、口いっぱいにもの
を入れて喋ると露骨に機嫌が悪くなる。前はそこまでは気にしてな
かつたと思うのだけれど。

「ケイこそ最近はどうなの?」

「んー、まあ、順調だね。栄古斎衰^活の死火^火山^山のレイドモンスターはま
だ倒せそうにないけど、目的は達成できたし」

と言つて、ケイはインベントリから一本の武器を取り出す。

「剣?」

「ユニーク武器だね。元々は使い道のないようなアイテムだつたんだ

けど、レイドボスの攻撃を当ててみたら武器を取り出せたんだ

「ユニーク武器ねえ。種類が多過ぎて、ウイキでも追いきれないのよね」

そもそもプレイヤーのハンドメイド武器が全体的にユニークみたいなものなのだから、纏めきれる筈がない。と私は思うが、ライブラリはそうではないのだろう。

「こいつも、性能は検証中つてどこかな」

ケイがインベントリへと剣を戻すのを横目にもう一口。

こここのポテトも塩味が効いてて美味しいわね。スペイスポテトも良かつたけど。

「こここの料理は気に入つたかい？」

「どうしたのよ、いきなり」

感想を言うからには食べないとね。

確かに蛇の林檎の料理は味がしつかりしている。

もうひとつ。

付け合わせのソースも味があるし、なにより状態異常にならないのは純粹に嬉しい。

うーん。もうひとつ。

もちろん、現実の料理と比べられるようなレベルでは無いけれど、ゲーム内で比較するならかなりの優良店だと……

「ぴやつ!?

どう答えようかと思案していると、ケイがずいっ、と身を乗り出した。突然のことに硬直していると、ケイの左手が私の顔の方に伸びていいやそこは、くちび……

「ソースついてる」
右の頬に手が触れた。

「え、あ……?」

「ああ、ごめん。つい癖で」

「……あの、そのつ、ゆびのソー……その、」

ゆびでぬぐつたソースはどうすりゅんでしか……?

「ん?なんだつて?」

「……そう、お花！お花を摘みにえ行つてくるわ！」
いちどへやをでて、れいせいになろう。そうしよう。

「あつ」

「あー、メグ、大丈夫？」

「……ええ。大丈夫よ。騒がせたわね」

焦つて立ち上がつたせいでバランスを崩した。椅子ごとひつくり返つてしまふなんて爆薬分隊として恥ずかしい。

視線を向けると、ケイはおしほりで手を拭いていた。ソースは今ごろあの白い布の中だろう。

「ところで、さ」

「なに？」

「シャンフロにはそんなシステムは実装されてないよね？」

「え、ああ！そ、そうね！」

アバターの顔が一層赤く染まつていく感覚に、私はつい顔を背けてしまつた。



なにやらメグの顔が赤い気がする。

いや、これはかなり赤いな。真つ赤だ。風邪でも引いたか？

元々VRシステムにはプレイヤーの体調を測定する機能がある。ほとんどのゲームでは緊急ログアウトのシステムでしかないが、シャンフロならそれがアバターの反映されたとしても疑問ではない。

そもそも、椅子から転げ落ちるなんてらしくない。

「メグ、本当に大丈夫？体調が悪いなら休んだ方が……」

「あー、いえ、ちょっと考え事をしてたらバランスを崩しただけよ。大丈夫」

「ならないけど」

「そんなことより食べましょう？ほら、フライドポテトも無くなつ

ちやつたし」

……いつの間に。

皿に山盛りにあつた筈のポテトはものの数分で綺麗さっぱり無くなっていた。

「……もう一皿頼もうか？」

俺は壁掛けのベルを鳴らした。

これもある意味では鍊金術

シャンフロには満腹度というステータスがある。

食事に心血を注いでいるプレイヤーならまだしも、僕やメグからすれば、食事という行為は空腹によるステータスダウンを回避するための行動でしかなく、【美食舌】もその行為に花を添えるちょっととしたスペースに過ぎず、普段の食事は最低限にしか行わないことが多い。

つまり、なにが言いたいかというと、

「ごめん、メグ。頼みすぎだつたね」

流石にステーキにピザとスペシャルパフェは頼みすぎだつた。ちなみにフライドポテトは合計3皿頼んだが全て空になつた。

「別に私は構わないけど、お金は大丈夫なの？私も払いましようか？」

「その点はご心配なく。メグのポーション、本当に高値で売れたんですよ」

数が数だったので、それはもう引くくらい高く売れた。買い取るペンシルゴンが満面のニヤニヤ顔でなければ完璧だつた。

というかペンシルゴン、まだPKペナルティの借金が残つてたと思うんだが、どこからあれだけの額を用意してるんだ？まさかサードレマの財政を握っているわけじゃあるまいし……いや、あいつならやりかねないな。

出会つたら口を開く前に殺せ、とはサンラクの言葉だが、全くもつてその通りだと思うね。

G_{H:}G_Cでもそうだったが、^{ベンシルゴン}あいつに対する最適解はシルヴィアみたい^{プレイスキル}なP_Sでのゴリ押しだ。録画をみたが、二つの意味であまりにも酷すぎて変な笑いが出た。流石魔王だよ。

外道のことをあれこれ考えていても仕方ない。以下の問題は目の前に広がる料理の数々だ。

ゲーム内とは言え、この量を残すのは忍びない……そうだ。

「どうしたの？ケイ」

「いや、もしかしたら『お持ち帰り』出来るんじゃないかと思つてさ」

呼び鈴を鳴らすとすぐに扉がノックされ、ウェイターがやつて來たことを知らせた。

「失礼します。如何致しましたか？」

「この料理を包んで貰うことは出来るかい？」

「……少々お待ち下さい」

数分して、テーブルの上には、蓋付きの、弁当箱のような容器に詰められた料理が並んでいた。

ゲーム的な処理で言えば、元の料理を消して箱を新たに表示するか、『お持ち帰り』そのものを出来ないようにするだけのことだと思うのだけど、流石はシャンフロと言うべきか。

俺たちが見たのは、ウェイターが一度箱を取りに行き、その箱につづつ菜箸で料理を詰めていく、という光景だった。



「ペッパーはこのままファティシアに向かうのかい？」

「いいえ。明日はちよつと用事があつてね。早めに寝ようと思うわ」「リスト_{宿屋}更新はあつちだつたわよね？」

「そうだね。もう今日は終わりかい？」

「いえ、折角だからあと1時間は素材集めをしようかと思つてるわ」

「それなら俺も手伝うよ。今から一時間だけつてなると、野良パー

ティは難しいだろうし」

延長戦、突入……！



「はい、皆さん集まりましたか～？」

先生の声が室内に鳴り響く。

「オールオッケー！」

そして高らかに挙手する女性。

ほらシルヴィア、あまりにも元気が良すぎて先生が驚いてるわよ。
「VRお料理通信教室にようこと。本日の講師を致します『三林

柚子^{ゆず}です。夏目さんとゴールドバーグさんは今回が初めてですね

「はい」

「あーーーい!!!」

VRお料理通信教室とは、フルダイブVRシステムを活用した『通信教育システム』の1つだ。

登録は実名のみ、アバターも本人再現アバターのみ、利用ごとに料金が発生するという、中々に制約の多いVRソフトだが、それらは全て『教育』に特化したためだといえる。

「メグ、このソフト、手が凄いリアルよ！」

「……両腕だけポリゴン数がやたら高いわね」

「そうでしょ？私も最初に講師に来たときはびっくりしましたけど、このソフトのウリらしいですよ？VRソフトだとどうしても現実とズレが出るけど、このソフトはそれを最小限にして、スマートに現実の料理スキルに反映させることが出来るんです！つてメーカーさんから講習を受けたときに熱弁されましたから」

このソフトは本人再現アバターに限定し、リソースの大半を料理関連に費やすことでそのズレを最小限に低減しているのだろう。

「では最初に、これまでの料理歴を教えていただけますか？」

それを思えば、NPCではなく人間の講師を採用し、受講者と同じプレイヤーとしてログインするシステムであるのも頷ける。

因みに実名限定と都度料金が発生するのは、講師に都度講習料が支払われるためで、講師の指名も可能なようだ。

「特にないわ！」

「小学校の授業以来です……」

今回はシルヴィアと私のプライベート講習で予約したので、このまつさらな空間には、私たち3人しかいない。

「……では、超初心者コースですね！」

次の瞬間、私たちの目の前にキッキンが出現した。エフェクトも一切無く、虚空から突然に、である。

「ワオ！」

「作りたい料理の希望などはござりますか？」

どうやら料理と関係ない部分はとことん簡略化しているらしい。
私たちのアバターも、両腕前腕から先を除けば非常にポリゴンが低く、特に足は歩くだけで違和感がある。

「チキン南蛮？ つてのが気になるわ！」

「定番どころで肉じゃがを……」

「なるほど。本日は四時間コースですので、両方作ってみましょう」

そう言つて先生がコンソールを操作すると、食材と調理器具が出現する。こちらも出現エフェクトなんてものはない。

「いきなり揚げ物も危ないですから、肉じゃがからやつてみましょう」「イエスマム!!」

「材料と道具はテーブルに並べた通りです。まずはじやがいもの皮を剥きましょう」

なるほど。見ればじやがいもと包丁、その他の諸々が置いてある。まずはじやがいもと包丁を取れってことね。

「ふんふんふーん」

「シルヴィア?! どんな持ち方してるの?! 格ゲーじゃないのよ!」

「ご家庭にあるのであればピーラーを使つた方が安全ですよ」

「ピーラー?」

「これですね。見たことありませんか?」

なんか見たことない道具が出て来たのだけど、なにそれの大きな栓抜きみたいなやつ。

「んー。昔々、ママが使つてた気もするわね」

「ピーラーを使えば、包丁よりも簡単に皮が剥けますよ」

なるほど。後で購入品リストに入れておこう。

「皮がむけたら、一口大に切つていきますよ。包丁を右手で持つて、左手は猫の手でじやがいもを抑えます」

「猫の手?」

「にやにやーーー!」

「そうそう。そうやつて指を丸めて押さえて」

「一口大つてこれくらい?」

「大体3cm四方くらいです」

「端っこつてどうすれば3cm四方にするの？」

「いやのはせにぐりよせにぐり！」

「にんじんはらんぎり……らん……ランソウ? 屢合切り?」

「衣に縫ひに送」

「まさか高速でみじん切りを？」

「玉ねぎはフライドポテトみたいに切ればいいのね？」

「水をとーん！」

「…今何時? どうも、」

「ねえねえ！ I H どうやつて使うの？」

焦げないよう慎重に……

「取に貢ひて弾少の者」

• • •

• • • • •

• • • •

•

•
•
•
•
•

• • • • •

八

「シルヴィア、猫の手」

「ジやが、ちは一口大、こんじんは乱刃」

「egoは？」

……あと3分

三才圖會

「……シリヴィア、油の温度は？」

180

「…°C? F?」

「C!」

「油が回つたら水を入れて煮る。と」

「メグ、アジミ」

「こつちもお願ひ」

「なんでこんなことに……」

俺は部屋のキッチンで料理する二人を、ただ呆然と眺めるしかなかつた。

つい1時間ほど前、俺の部屋のインター^{ホン}が鳴つた。

◆◆◆

「ケイ、開けてー」

シルヴィアの声に、またか、と思いながら玄関へと赴き、ロツクを外し、扉を開ける。

「こ、こんばんは……いや、こんにちは……かしら?」

「メグ……どうしたの? 二人揃つて」

「オジャマシマスー」

「あつ、シルヴィ?! また勝手に! てか靴は脱いで頼むからつ!!」

「まだ馴れてないのね」

「自室から外は土足が基本だからねあつちはアメリカ」

以前自分の部屋はどうしてゐるか、土足で生活してると敷金が返つてこないぞ、と忠告はしたのだが、戻つてこなくとも大丈夫、とゼンイチな回答をされた。

「で、メグ。その荷物は?」

「あー、気付いちやつた?」

氣付くもなにも、段ボールを両手で抱えてたら誰だつて氣になる。

「まあ、今日の本題はこれでね。ちょっと失礼するわ」

シルヴィアは常に自由だが、メグも時々自分を譲らないことがある。こうなると俺にはもう止められない。

メグが段ボールを抱えたまま、奥の部屋へと向かっていく。

「メグ? リビングはこつち」

と指差し声を掛けたが、メグはそのままキッチンへ入つていった。
そう言えばシルヴィアは？と思つたが、廊下に脱ぎ捨てられた靴以外に痕跡はなかつた。

◇◇◇

その後、靴を整理してからキッチンに行つたときは本当に驚いた。
まさかシルヴィアとメグが二人して料理するなんて言い出すとは思わなかつた。

「どうぞ」

机の上に並べられたのは大鉢に入つたにくじやがと大皿のチキン南蛮。

用意された小皿フォークと箸の数を見るに3人分なのだろう。それらは、中々どうして美味しそうに見える。

しかし、人の手料理なんていつぶりだろうか。

出前だつてお手製には違ひないが、やはり作った人と対面して一緒に食べる、なんてことは実家に帰省した時以来やつていない。

「……頂きます」

まずはチキン南蛮から。

南蛮だれの染み込んだ揚げ鳥を、タルタルソースと一緒に頬張る。
まず感じたのは南蛮だれの甘味と酸味、それをタルタルソースが優しくまとめあげ、玉ねぎの食感と唐辛子の刺激がアクセントとなり、口の中いっぱいに広がつた。

全ての要素が奇跡的なバランスで合わさり、とてつもなく美味……ん？

なんだ？

一筋の違和感の正体は至つて簡単なものだった。
……揚げすぎている。

味付けが完璧なだけに、少し硬めの肉と、若干の衣の苦味が浮いている。

「ドウ？ オイシイ？」

当然、シルヴィアに返す言葉は一つ。

「ああ。美味しいよ」

わざわざ出向いて手料理を振る舞ってくれる女性を無下には出来ない。

そもそも気になる、という程度で全体で見ればかなり美味しいのだ。あえて指摘するレベルじゃない。

リザルト画面よろしくガツツポーズを決めるシルヴィアを横目に、今度は肉じやがに手をつける。

今気付いたけどあれだな。白米が足りない。後でパツクのごはんを温めよう。

氣を取り直して、見るからに味の染みていそうなじやがいもを頬張る。

「……ど、どう？」

「……うん。美味しい」

なんというか普通に美味しい。

良くある肉じやがというか、教科書通りというか、とにかく平均的で安心する味付けだな。

「……良かつた」

メグがほつとしたように一言を呴いたのを皮切りに、シルヴィアとメグも食事を始める。

話題は料理から徐々に G H : C とシャンフロ^ムに逸れていき、若干の緊張感が解れたことに、俺は安堵するのだつた。

◇◇◇

「それじゃあ、また今度

「ああ、またな」

久々のゆつたりとした夕食の後、今度のチーム戦やらシャンフロの話ををするうちにいつの間にか夜も更け、解散の時間となつていた。

途中何度もシルヴィアから対戦の誘いがあつたが、そもそも私の VR 機器は自分の部屋があるので無理な話だ。

最終的には帰宅後三人で G H : C で落ち合う流れで落ち着いた。

「また今度、何か作るわ」

「ああ、うん。でもまあ、期待せずに待つてるよ。毎回俺の部屋まで来るのも大変だろうし」

やつぱり引っ越そうかしら？隣は無理でも一つ下とか、近くのマンションとか……シルヴィアが休暇を終えたら入れかわりで入るとか。「じゃあ今度はお弁当でも作るわ。チーム戦の時は難しいけど、イベントの時くらいならいいでしよう？」

昇り坂の先に果ては無く

「カルダモンさん、ありがとうございました！」

「いえ、こちらこそありがとうございました」

閃霆万里の坂道を越えた私達は、遂に旧大陸最後の街、ファイフティシアに到着した。

編成時の役割を完遂した野良パーティは早々に解散され、各々街の雑踏に消えていく中、私はある場所を目指していた。

それは未だ抽選待ちの続く新大陸連絡船ではない。なぜ新しい船が造られないのか、ゲーム的に言えば何故新コンテンツに課金要素の欠片もないう制限が課せられているのか私には分からないが、移動にリアルタイムで一週間もかかる船に乗るのは、今の私には時間の無駄でしかない。

私のアバター、ペツパー・カルダモンのレベルはまだ9^{レベル上限}に達していない。ケイとレベル上げ^デしていたとは言え、そもそもそのゲーム設定として旧大陸踏破そのものにはそこまでのレベルは必要無いし、私自身レベルキヤツ^{上限}解放よりも、鍊金術師を優先したかつたというのもある。

故に、ファイフティシアのもう1つの特徴である路地裏も目的地ではない。ユニークモンスターの関わるクエストが発注されていたことで幾らか注目されているらしいが、私には関係ない。

「……そういえば、何も聞いて無かつたわね」

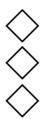
R·P·Aから聞いた、ファイフティシアならまだアセンションホーンの聖角が買えるという情報をもとに、急いでここまで来た。

しかし、そもそも誰がどこで売っているのか分からない。

「失念してたわ」

それならやることはひとつしかない。

「まずは情報収集ね」



「で、ここに来たわけね」

「まあ、そういうことです」

私が最初に扉を叩いたのは、当然と言うか必然と言うか、薬剤士系職業が集まるギルドだった。

餅は餅屋というが、薬の材料については薬剤士ギルドに聞くのが一番早い。ウイキという手も無くはないが、とにかく重いし、本格的に閲覧するには一度ログアウトしなければならない。

リアルタイムの情報としてはおそらく掲示板がもつとも早いのだろうが、どうもこれまでの経験からしても、情報の早さと正確性を両立するのであれば、ギルドが最適だろうという結論に至った。

「それで、どういう状態なんですか？」

私が尋ねると、おそらく先輩であろう女性プレイヤーは少し苦々しい顔を見せた。まあ何となく理由はわかる。

「聞いてるとは思うのだけど……アセンションホーンの角、特にあなたが求めてるものは完全に品薄な状態よ」

「神話の大森林にレイドモンスターが出現した影響と聞いたわ」「こちらにもそういう話が来てるわ。ウイキはまだ検証段階みたいで、詳しい情報は載つてないけれど、聞く話によると『緑色の昆虫』が出るらしいわ。それもたくさん」

「うわあ……あまり近寄りたくないですね」

「まあそんなこんなで、アセンションホーンの流通量が激減してるので。より正確には、NPCの正規店ではまず取り扱ってないわ」

「ここまでおおよそRPAから聞いた内容と合致する。

「そうすると、非正規のNPCかプレイヤーから直接買わないといけないんですね」

「そういうこと。それに関してはギルドにツテのある商人プレイヤーがいるから教えてあげるわ」

「おや、これは意外だ。」

「紹介までしてもらえるんですか？」

「一応ギルドの方針があつてね。ここまで品薄だとどうしても買えない人は出てくるから、当面の間はどうしても必要な人……あなたみたいに『ジョブエンジに必要なプレイヤー』優先ってことになつ

たのよ。私たちとしてもある程度鍊金術師が増えてジョブの研究も活発化してほしいしね」

「ありがとうございます」

それから、商人プレイヤーと取引を行つてゐる路地裏を教えてもらつた私は、共有設備でポーションを作成し、ギルドを後にした。

◇◇◇

「なるほどなるほど」

商人プレイヤー『ヨルム』に事情を話すと、まず所持金の確認を確認された。

「残念ながら金額が足りませんねえ」

「……高騰してると聞いて、かなり用意したつもりだつたのだけれど」

「いや、惜しい線いつてますよ?ええ。あともう少しあれば足りますからあ」

「……因みに値引きとかは……」

「残念ながらこれ、値引き後価格なんですよ。あなた、薬剤士ギルドの人でしょ?これでも仕入れ値ギリギリでさあ」

しばらく待つてますから、貯まつたらまた来て下さいなあ。と頭を下げるプレイヤーにそれ以上の値引き交渉をする気も起きず、私はその場を後にした。

「取り敢えず、さつき作つたポーションはRPAに売るとして……それでも少し足りなさそうなのよね……」

高騰に高騰を重ねた価格に対する少しさは、私が今から稼ぐには余るほどに高額だつた。

◇◇◇

モグモグ……

いや、これは違うのよ。

モグモグ……

RPAを探して蛇の林檎ファイフティシア支店を見つけ(どうも各街にあるチエーン店みたいなものらしい)、無事ポーションを売却して路地裏を抜けたところで見つけてしまつたのだ。

モグモグ……

……ポテトフライの屋台を。

目算通り、ポーションの売却額は目標には足りなかつたので、別で稼がなきやいけない。ポテト一個くらい誤差だから大丈夫。

モグモグ……

大丈夫大丈夫。

「……ん？」

ふと目が合つたプレイヤーがこちらに手を振つてゐる。
プレイヤー名は……見覚えが無いわね。

「……どうやら私みたいね」

後ろを振り向いて見たが、誰もいないので、やはり私に對して手を振つてゐるのだろう。

勧誘や出会い目的で来られても困るので、こういう時は無視するに限る。

「はじめまして。えっと、ペッパーさん」

踵を返したところで先手を取られた。

「……なに、かしら？」

「装備を見るに、薬剤士系の方ですよね？」

「……まあ、そうだけど」

「アセンションホーンの聖角、買いませんか？」

「前？後ろ？」

「もちろん前角ですよ」

なるほど。買い取り手を探しているところに、私が通り掛かつて手を振つていたのね。

「金額は？」

「おつ。買ってくれますか？」

「金額を聞いてから考えるわ」

マニユラが手招きする。はいはい。こつそり耳元で言いたいのね

……

……安い。とても安い。

ヨルムの指定した額から一回り二回り安くなっている。
「……随分安いのね」

「え？あ、ああ。……そう、かもな。……実を言うと僕は商人。プレイヤーじゃなくて……友人、パーティメンバの狩った角の販売窓口みたいな？形なんですよ。だから、そう、実質直売みたいなものなので、他より安いのではないですかね」

「なるほど。そういうことね」

それでも幾らか安すぎる気もするけど、私の手持ちでもなんとか買える金額だし、悪くは無いわね。

「それで、角の受け渡しなんですけどね」

「ん？何があるの？」

「ついさっき狩ったところなので、まだパーティメンバーが森の中なんです。神話の大森林の入り口で受け渡しになるので、ついてきてくれませんか？」

いや、私はまだ買うとは……いや、そこまで安かつたら買いたくなれるけどね？

返事も聞かず歩き始めるミニュラに軽く不平を覚えつつも、私は付いていくことにした。



「おお……」

ファイフティシアから開かれる門の一つをくぐり、エリア『神話の大森林』に出た私は息を呑んだ。

跳躊跋扈の森とは違う。文字通り神秘的な森の出で立ちに、改めてこのゲームのクオリティの高さを実感する。

「もう来る筈なんですが見えませんね」

ミニュラが取引場所として指定した、森の前の空き地には、軽く見た限り人影はない。

「ちよつと呼びに行つてくるので待つていてください」

ミニュラが森に消え、私は一人になつた。

……いや、違う。

背後から微かに空き地の土を踏む音がする。

背後からだけではない。よく聞けばまるで私を囲むように人の気配がする。

「……つ」

地を踏みしめる音に体をずらせば、直剣が先ほどまで私がいた空間に滑り込む。

「レツドネーム、PKね？」
ブレイヤー名が赤い

「ちつ、仕留め損なつた！」

「なにやつてんだよ！」

「バレたら仕方ない」
袋叩き

「いつも通りつてな」

「1、2、3……4人かしら？」
プラン1に失敗したのでプラン2に切り替えた、つてところかな？

「ずるいとは言わせねえぜ」

相手の武器はそれぞれ直剣に両手剣、クナイにメイスって感じね
……おつと

メイス使いの上段大降りを最小限のステップで回避しつつ、カウンター気味に斬撃を叩き込む。

「かふつ……」

「うおらあああああ！」

入れ替わりに雑ぎ払われる両手剣を屈んで回避、逆サイドから來ていた直剣も、屈むとは思わなかつたのか空振りする。……クナイ使いは射程外ね。投げる素振りも無い。

「ちつ、躲しやがつて！」

空振つた直剣使いに足払いをかけ、そのまま体勢が崩れたところを蹴り飛ばす。

「……つつ！」

「こつち来んな！邪魔！」

クナイ使いと直剣使いは衝突、メイス使いはまだ怯んでいる。とな

れば

「お前、薬剤士^{生産職}じゃ無かつたのかよ!!」

先に両手剣の対処!

直進して斬撃、防がれる直前でスライドムーブ起動。武器の無い左側面へ移動してラツシュスマッシュを起動!

「あつ? 何処に行きやガツ……」

連撃を浴びせつつ見やれば、メイス使いが起き上がり初めている。今起きられると面倒ね。

ラツシユスマッシュの終了と同時にインベントリを操作開始。起き上がりかけのメイス使いとついでに直剣使い達に向けスプラッシュュボムを投擲する。

これでもう数秒は怯んだままだろう。

「てめつ、ふざけやがって……!」

両手剣のこれまた大振りの薙ぎ払いをしゃがみ回避、からの足払い。体勢を崩したところにドリルピアッサー、怯んだら斬撃、斬撃、起き上がりに足払い……

あ、これループ入ったわね。

「こいつ、よくもガナーを!」

メイス使い達が起きる頃には大剣^{ガナ}使いを倒させていた。取り敢えずここまで分かつたことがある。

「あなたたち、随分軽装なのね」

武器は質の良い量産品に見えるが、斬つた感触からして、防具は安物だろう。でなければ嵌め殺しでもこんな早くは倒せていない。

「だからどうしたあ!」

私の対人戦闘の経験は9割9分格闘ゲーム、特に最近はG.H.C.^{全日本}*シルヴィア^{日本}とケイがほとんどを占めているわけだが、それ故に対戦相手の動きの癖にはそれなりに精通しているつもりだ。肉薄するクナイを剣で弾き落とす。

「!……このつ」

反射的に打ち込まれたもう片手のクナイの軌道を左手で反らし、そ

のまま腕を掴み……

「ちよ、あつ……」

返しの刃でクナイ使いの胴を下から掬うように斬り上げる。

懲りずに大上段に振り上げたメイス使いに向かつてクナイ使いを蹴り飛ばせば……

「ゴトー！ナンベ!! 大丈……あつ」

端的に言えば、このPK集団は強くない。

直剣使いを近接格闘で沈める。

「てめえ！アリリベをよくも……！」

プロと一般の差はあるにしても、とにかくPK達のプレイヤースキルが低すぎる。

武器の射程や特性を理解していなければ、当然空振りや隙は増えるし、有効打は減る。……稀に筋の良い動きはしているが、あれは恐らくスキルなのだろう。とにかく武器に合わせた体の動かし方が分かつていらない。

立ち上がったクナイ使い……もとい忍者プレイヤーの右手には刀……確かにあれも高レベル量産品の武器だつた筈だけど、それも使いこなせなければ宝の持ち腐れね。

「いくぞ！ナンベ!!」

絶妙なディレイを挟んだ同時攻撃……だが、恐らく偶発的なものだろう。これが狙つてできるなら最初からやつていい。

メイスの一撃をワンステップで躱せば、直後の刀の一線にカウンターを叩き込める。

私はシャンフロ以外では格闘ゲームしかやらないが、格闘ゲームにだつて武器を使うものはある。そして、格ゲーに置ける武器は一部のキャラクターの特徴^{クセ}でしかない。中にはキバレークライシスのような騎乗かつ武器戦闘メインのような特殊な作品もあるけれど、基本的に武器持ちだから強いなんて調整はされていない。

そんな格ゲーにも『素手よりも武器の方が強そだから』『射程が素手より長いから』という理由だけで武器使いを選ぶビギナーは一定数居たりする。

……そして地方の対戦イベントでそういうプレイヤーに会った時は、決まってこう返すのだ。

「結局のところ、使いこなせる人が強いのよ」

◇◇◇

まあ、シャンフロは格闘ゲームではないのでステータス差とユニーク持ち出されると厳しい部分もあるのだけれど。

「あつたわ。これね」

特に苦戦も無くギルドに戻つた私は、PK情報掲示板を覗いていた。

237：名無しの開拓者

ナンベ、アリリベ、ゴトー、ガナーツ四人組なんだよあれ森の前で待ち伏せされた

238：名無しの開拓者

△△237

また来たな

241：名無しの開拓者

△△238

俺、純騎士だけど初耳

243：名無しの開拓者

→さつきから生産職しか被害者がいない件

見立ての通り、プレイヤースキルはあまりなく、専ら弱者を囮んでアイテムとマーニをがめていたらしい。
生産職

250：名無しの開拓者

△△237

待ち伏せつて言つたけど、なんで森なんか行つたん?

259：名無しの開拓者

そういうえば生産職がソロで行く場所じやねえよな

265：名無しの開拓者

▽▽250

待ち合わせ

「ん？」

290：名無しの開拓者

聖角買う約束だつたんだよ

294：名無しの開拓者

あれ、原産地あそこだつけ?

296：名無しの開拓者

▽▽294

らしい。俺は見たことないけど

311：名無しの開拓者

▽▽290

もしかしてそいつマニユラ?

320：名無しの開拓者

お?

328：名無しの開拓者

ん?

340：名無しの開拓者
流れ変わつたな

なるほどそういうことね。

◇◇◇

「ヨルムさん」

「おお、ペツパーさんじやないですかあ」

あの路地裏に行つてみると、タイミングよく商人プレイヤーのヨルムがそこにいた。

「もしかして、お金集まつたんですかあ？」

「ええ、なんとかね」

インベントリを操作してマーニを取り出し、ヨルムのインベントリ操作を待つ。

「ペツパーさん強いんですねえ。PK四人相手に快勝は中々ですよお？」

「あら、知つてたのね」

「最近出てきた人たちでしてえ、商人口わたくしホールプレイヤーとしても困つ

てたんですよお」

「お陰様で、なんとかお金も集まつたわ」

お互に譲渡処理を行い、マーニと聖角の交換を行う。

他にも必要な素材は幾つかあるが、最高難度のコレを手に入れられたのはかなり大きい。

「四人分ともなるとお、結構な額になつたんじゃないですかあ？懸賞

金」

「まあ、それなりには、ね」

ヒュンツ

「……！」

風切り音と共に、HPが減少した。足元に刺さつた矢に、右腕に走る僅かな痺れ。

……屋根の上ね。

路地裏の壁となつてゐる家屋の上を見上げると、弓を引き絞るプレイヤーの姿。

「はへえ?! あ、あれマニユラじやないですう?!!」



くそつ、外しちまつたか。

「まあ、次で仕留めりや問題ねえか。「天眼の一矢」

あたんねえなら、スキルで命中をあげりやいいだけだ。

「ちつ。避けやがつた」

命中が当たるつて言つてもホーミングじやねえしな。
一射目さつきので氣付かれちまつた。

「ほかに命中上^{アサヒ}げれるスキルは……めんどくせえ。適当に使うか。
「鶴瓶射ち」「噴流の螺旋矢」

あとは引き絞つて……ん?

「あ?どこ行きやがつた?」

大通りに向かつたか?流石に人混みに入られると殺りにくい。

「取り敢えず出口塞いで……ん?どこにもいねえぞ?」

んなバカな。たかが生産職にこの一瞬で路地裏抜けるほどのアシがあるとは思えねえ。

となると脇道に逃げられたか?

パリン

「ん?なんだ今の音……」

一本手前の脇道からだな。

「なるほど。さてはそつちでポーション浴びてやがるな?」

「今度こそワンショットキルしてやる」

そうと決まりやあ、話は早え。弓引きながら脇道を見下ろして……

「ん?」

いねえぞ?



「ヨルムさん、大丈夫ですか?」

「いやあ、こつちは大丈夫ですけど。どうするんです?」

屋根の張り出しの真下に入つたので、囮のポーションとあわせてもう少しの間は見つからぬだろうけど……

「まあ、時間の問題でしようね。あの高さじや投擲は届かないし……ヨルムさんはインベントリに何かない?」

「んー。そうですねえ……」

「ああ、使い捨て魔術媒体ならありますよお」

なるほど。ラインナップは……



28 : ヨルム@聖角あります

ミニユラ捕つたどー

〔添付画像…〕

31 : 名無しの開拓者

▽▽28

え?これマジもん?

33 : 名無しの開拓者

▽▽28

つか、ヨルムって商人口ールプレイヤージャ?

36 : 名無しの開拓者

▽▽28

k w s k

38 : ヨルム@聖角あります

ほほほほペツパーさんの功績ですねー

41 : 名無しの開拓者

▽▽38

ペツパー i s 誰

4 3 : 名無しの開拓者

▽▽4 1

前板の 7 5 2 で四人組 P K K 報告した人

4 5 : 名無しの開拓者

▽▽4 3

あれマジだつたのか：

4 8 : ヨルム @ 聖角あります

P K K への報復だつたみたいけど、最終的にアポートショックボム
落下スタンから私が縛つてそつち系のプレイヤーに引き渡したよ
まさか鑑定用で取つてた考古学ジョブが役に立つとは

5 0 : 名無しの開拓者

▽▽4 8

落下スタンつてどこで戦つたんだ

5 1 : ヨルム @ 聖角あります

▽▽5 0

街中

屋根の上から弓打つてきたのよ

5 4 : 名無しの開拓者

つまりアポートで屋根上まで転移→ショックボム当てて屋根から
落とす↓ヨルムつちが縛つて終わりつて流れか

5 7 : 名無しの開拓者

シャンフロつて重力がちゃんと働いてるから遠距離だと高台有利
になりがちなんだよな

◇◇◇

「ぐり。と炭酸が喉を通り過ぎる。

「ふう」

冷蔵庫を開け、いつものを取り出し、電子レンジに放り込む。

「時間は……まだあるわね」

こうして定期的にシルヴィアと対戦しているものの、当然のように全戦全敗で、ケイも巻き込んで反省会の毎日が続いている。

温め終わつたポテトフライをつまみ、ふと今日の出来事を思い返す。

「PKでのレベルなのよね」

やつぱり対人に関しては格闘ゲームをした方がいい気がするのよね。

「でもイレギュラーが多いのは確か、かな」

特にマニユラというプレイヤーに無警戒で攻撃を受けたのは良くなかつた。可能性は十分あつたことなのに、勝手に終わつたことと思ひ込んでいた。

「カリカリになるまで温めても美味しいけど、ちょっと温めてしんなりしてるのはいいのよね」

そもそも、最初にPKに囮まれた事そのものが、想定不足と油断が招いたようなもので

「安すぎるとは思つたのよね……」

相手の思考を読む、引き出す会話術も勉強しないとダメかも知れない。シャンフロだけでなく、格ゲーにも活かせる技能には違いないわけだし。

……流石にアレはやりすぎだと思うけれど、ね。

名前隠し

天駆けるポテト

「……N_u^メ2m_e^グg、後方右30度に β 型」

「わかつたわ！」

急旋回は確かに……サイドジェットを使つて……こう！

……いた！中距離型ならここは射程外ね！遠距離ミサイルをロツクオン……発射！

「よし、これで一機……つて、ええ?!」

近距離型！まさか中距離型の影に隠れて……



「皆さん今日もこんばんは！TVユーガツタから愛を込めて、笹原エイトのチャンネル8エイト！始まりますよーっ！」

笑顔の女性の挨拶と同時に、無味乾燥なスタジオが一瞬にして廃墟のようないきなり都市のそれに変わる。

「さあ、気づきましたか？そうです！今日はTVユーガツタ第二スタジオからのお送りになります！凄いですね、ここGHCの放送以

来ですよ！どうなつてるんですか??」
高層ビルが人ほどのサイズの都市の中に佇む光景は少しちぐはぐしていて、まるで特撮番組のミニチュアセットに迷い込んでしまったようだ。

「あ、流石にカンペは紙なんですね……なになに？『※当企画はBLACK DOOL様の御厚意で全日第二スタジオでの収録となります
byディレクター』だそうです！BLACK DOOLさんありがとうございました！」

笑顔で手を振る彼女の真後ろのビルが偶然にも崩れ落ちる。

「では、本日のゲストをお招きしましよう！」

GHCの時ほどではないが、それでも華美な演出がスタジオの一角を彩り、その先から1人の女性が登場する。
ニトロスクワッド爆薬分隊からお越しいただきました夏目さんでーす！いやあ、久し

ぶりですね夏目ちゃん！JGE以来じやないですか？」

「そうね。今日はよろしくね」

「前回は魚臣さんでしたし、第二スタジオと爆薬分隊は何か縁があるのかかもしれませんね」

「ご期待に答えるよう頑張ります」

「さあ、BLACK DOORと聞いてピンと来た視聴者の皆さんも多いんじゃないですか？今回のゲームはこちら！」

「スタジオ上空から巨大な人形が降つてくる。

「Nephilim Hellflow^{対戦型}2」です！通称ネフホロ2なんて呼ばれていますが、JGEでのAR中継やGHCに続くシャンフロエンジン搭載ゲームとしてご存知の方も多いのではないでしようか！今回は数週間に渡り夏目ちゃんにストーリーモードを遊んで貰います！……そうです！今回シリーズものなんですよ!!!」

「あれ、このゲームってPVPゲームだつたと思うのだけど……」

「そこらへんの細かい部分は、こちらの方にお話いただきましょう！」

その掛け声に合わせるように、巨大な人形の胸部が白銀の光線によつて撃ち抜かれる。

機衣人^{ネフリーム}が内側から光を放ち、爆発する。

そして白煙が消えるとそこにはヤカンを被った少女がいた。

「助つ人ネフホロプレイヤーのルストさんでーす！つて、その被り物はどうされたんですか??」

「……流石に素顔は止めた方がと友人に止められたので。ちなみにこれはネフホロ……2との区別のために敢えてネフホロ1とする……でプレイヤーのアクセサリーとして使えるいわゆるネタ装備。設定上はネフリームと融合する実験における初期に用いられた道具という口マン溢れる代物で……」

かくして妖怪ネフホロ女……もとい早口少女は再度公共の電波に乗つたのだつた。



「……というわけで、ここまでが『思考リンク式の簡易操作』と『完全マニユアル操作^{1から継続する操作方法}』。見たところNa²m²eg²はセンスがある

¹で追加された操作方法

²で追加された操作方法

……というより、もしかして1をやつたことがある？ マニュアルの動きがネフホロ初心者のそれじゃなかつた』

怒涛の操作説明に若干あたふたしていた私だが、彼女の言うとおり私はネフホロ1を一度だけやつたことがある。

「別のゲームの知り合いに誘われて一度だけ最終イベントをね」「……なるほど」

コツクピット越しに（本来感じるはずも無いのだが、流石はシャンフロシステムということだろうか）、熱い視線を受けた気がした。『基本的にはネフホロ初心者は簡易操作をオススメする……けど、N a 2 m e gならマニュアルも悪くないとと思う』

ネフホロ1の操作は、端的に言つてとんでもなく難しいの一言に限る。かくいう私も、ファイナルイベント時にやたらテンションの高いコーチに教わらなければ分からなかつただろう。というか彼つて彼よね？色々なゲームをやつているとケイから聞いてはいたけれど、本当にどこにでもいるのね。どこかで対戦していくうなのに、どうして今まで気付けなかつたのかしら。

「……それで、N a 2 m e gはどうちにする？ 私はどちらも出来るので問題ない」

「マニュアルにするわ」

悪くないと言われたら試さない手はない。ロボットアクションを練習しておけば、どこかで役に立つかもしれないし……番組としても盛り上がり嬉しいわね。

ピコン

ん？ これは……番組ディレクターからのメッセージ？

『尺も良い具合なのでそろそろストーリークリエストを始めましょう』
「……操作方法も教えたから、そろそろ実践に入る』

◆◆◆

サンラク：流石トレンド入りした早口少女。説明の質が違うね。

鉛筆騎士王：他人が聞き取れるギリギリの高速詠唱で一度も間違えずかつ分かりやすく説明するのって実際すごいよね

カツツオ：メグがネフホロプレイヤーがサポートに来るつて言つてたの聞いてまさかとは思つたんだけどね

サンラク：そりやこうなるわな

【鉛筆騎士王　さんがモルド　さんを招待しました】

サンラク：で、モルドもこれ見てんの？

モルド：見てるというかその……

モルド：付き添いで来て樂屋待機です……

カツツオ：まさかの保護者枠

鉛筆騎士王：体格いいからボディーガード向きだもんねえ

サンラク：しかしヤカン頭はどうかと思うぞ

カツツオ：ヤカン頭が何言つてるんだか

モルド：つく、はははは

サンラク：え、こわ

カツツオ：笑う要素あつた？

モルド：ちが……あは、つ、あはははは

鉛筆騎士王：サンラクくんのヤカン頭思い出して吹き出してるん

じやない？

サンラク：あ、？

◀▲
第
1
s
t
ス
テ
ー
ジ
、
ク
リ
ア
条
件
は
機
衣
人
ネフイリム
1
体
の
討
伐
。

『……難易度はHARD。初期装備の初心者にはかなり厳しいけど、そこは私がサポートするので気にしなくていい』

「そろそろストーリークリエイターエストが始まるみたいですよ！難易度高そうですが、大丈夫なんでしょうか？」

スタジオのARが1stステージへと代わり、画面端にNa2megのコックピットの状況がワイプで映し出される。

「メグちゃんはちょっと緊張してるように見えますねー……出てきましたよ！」

ステージに投影されたのは、さつきぶりのNa2megの初期機体と、ルストの深緑の機衣人^{ネフイリム}。

『… N a 2 m e g の選んだ素体の武器は物理ブレードと換装式单発砲。接近必須だから被弾には特に気を付けること』

「メグちゃんは格ゲーのプロですし、熱い近接戦闘に期待ですね。ルストさんの機体はかなりカスタムしてますが、どういった動きをするのか楽しみです！」



カツツオ：ねえ、モルド。落ちついた所で悪いんだけど、あれどういう構築なの？

モルド：あれは

サンラク：格ゲーのプロなら近接口ボ戦得意らしいな。そこの魚類はボロボロだつたけど。

カツツオ：どこ行つても変態拳動するクソゲーマーとは違うからね。苦手分野くらいある。

サンラク：あ、？

カツツオ：お、？

モルド：えつと

鉛筆騎士王：バカ二人はほつといでいいから解説お願ひ。

サンラク：なお一番下手だつたのはこいつ→

鉛筆騎士王：戦争がお望みかな？

カツツオ：戦争ジヤンキー

サンラク：シャンフロで十ぶ……あ。

モルド：あの機体は今回の番組専用で組んだ機体で

鉛筆騎士王：サンラクくうん？何を思い出出したのかなあ??

モルド：移動は遅くなつた比翼連理をイメージするとサンラクには分かりやすいかも。左右非対称のブースター配置で不規則拳動をして相手を攪乱したり、回避に用いたりするのが基本かな。装備は夏目さんのサポートを大前提にしてネフホロ2でも特に火力の低い中距離手持ち式連射砲台をメインの火力に据えてる。火力面で見ればもつと優秀な装備は沢山あるけど、相手の攻撃に挟み込んで妨害する

ことに向いてる火器つて感じかな。その他はネットランチャー、高射程レーダー、リフレクションバリア、拘束・索敵・防御を想定している構築だね。

鉛筆騎士王：ルストちゃん、サポート特化とかできたんだね。

サンラク：サポート＝モルドのイメージが強すぎるのが悪い。

モルド：ちなみにソロになつた場合に備えた隠し装備が背部に……

◇◇◇

5t hステージは拠点防衛戦。ステージ説明によればほぼ無尽蔵に現れる機衣人が規定の境界線を越えると敗北になる耐久戦らしい。

「多対一、つてわけね」

ここまで立回りとルストさんのサポートで1対1を作り出して戦つてたけど、流石に今回は多対一で戦わないといけなさそうね。

「……来たわね」

右前方に最初の機衣人が現れる。あの装備は近接型ね。さつき購入したレーザー砲は……右小指がトリガー。

操作方法を巡らせながら操作した直線軌道のレーザーが機衣人を貫く。

「これは使いやすそうね」

「……正面から2体、左前方に1体。右の機衣人は胸部装甲破損」

「レーザーでも一撃は無理、つてことね」

レーザーは遠距離対応だが、数発打つとエネルギーチャージに入らしい。

こちらの装備は中・近距離用だが、接近すると防衛ライン前ががら空きに……いや

「……Na2mегは確固撃破を狙つて。防衛線はこちらで維持する」

後ろは任せていい。

噴脚出力最大、正面の遠距離型機衣人最優先！

私は可及的かつ速やかに給与を底上げしないといけないので……

!

進路を一步右にずらして敵のミサイルポッドを躱す。……つと、遠距離レーザー。

被害は許容範囲内に、能率は最大限！

レーザーが右肩を掠める。……オーケー。装備損壊は軽微。そしてここまで来れば私のテリトリリー！

「チエーンソーの威力、見せてもらうわよ！」

ギヤリギヤリと、金属の擦れ合う甲高い音が響く。

左足に喰い込んだ右腕一体型チエーンソーはその装甲を削り取り機衣人^{ネフイリム}本来の左足を破壊していく。

「いいじゃない多段ヒット！物理ブレードから変えて正解だつたわ！」

「……前作に比べてネフホロ2では多段ヒット武器が強くなつてダメージ効率から見て初心者にもオススメなジャンルの1つ。……一方でチエーンソーは可動部分がある関係上武器の耐久が低めかつ、射程も少し短いので装備種類の少ない内は物理ブレードを使い回すのもアリだと私は思う。あと背後注意。後ろの機衣人のチャージがそろそろ終わる」

なら左足が損壊した機衣人は一旦放置し……あぶな。こつちもミニサイル発射寸前じやないのよ！

咄嗟に左手を伸ばし、機衣人^{ネフイリム}を投げ……



サンラク：あ。

モルド：ああ……

鉛筆騎士王：直撃したねえ

サンラク：格ゲーマーの悪癖が出たな

カツツオ：クソゲーマーに言われるとなんかムカつく



『……ネフホロ2は武装と立ち回りで戦うのが基本。格ゲーのノリで

近接格闘を試みるとこうなる』

「メグちゃん大丈夫でしようか?! 見たところミサイルポッドとレーザーに直撃したように見えましたが……」

『機衣人(ネフィリム)はサイズもあるけど密度が高くて重い。レーザーの盾代わりにするなら、噴脚で背後に回り込む方がベター。……あの距離だと遠距離レー・ザーは威力が3~4割減だけど、普通なら続行不可能』

「あつ、見えました!……うわあ。ギリギリ耐えてますが、かなりボロボロですね」

『……Na2meg、損壊状況』

ミサイルが残した白煙から、Na2megの機体が飛び出し、
ルストの横防衛ラインまで待避する。

『えーと……見ての通り、噴脚は無事よ。他はこの通り』

上げた右腕には肘から先が無く、当然そこについていたチエーンソーもない。左手は残っているが、肩口のレー・ザー砲は見る陰もない。

「どうやらまだ動けるみたいですが、攻撃用の装備が壊れているようです!このステージは一度リタイアになるのでしょうか?!

『……咄嗟に右腕でガードしたのは正解。続行する』

「おつと、なんとなくそんな気はしてましたが、ルストさんスバルタですかね?!

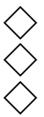
『……武器が無いなら、奪えばいい』

その言葉よりも早く、深緑の機衣人(ネフィリム)が左方の敵に肉薄する。

「ルストさん一瞬で近づいて……あれ? Uターンして戻つてきましたね」

『……取り敢えずこれ使つて』

「あれは……ブレードですか?あれ? いつたいどこか……あー!! 左の敵の武器がなくなつてます!! いつのまに?! そしてブレードをメグちゃんにパス!」



「あ、ありがとう」

連射砲台その武器って火力は低かったと思うのだけれど？

「……質問は後。片腕が無い分バランスに気をつけて」

さも当然のように一瞬で武器を強奪してきたルストさんには舌を巻いてしまうが、相手の機衣人ネフィリムは私を待ってくれない。

「ん、これは確かに」

先ほど逃げるときに違和感を感じたが、ブレードを持つとそれ以上の動きにくさを感じる。

「……片腕の場合、直線移動は両腕とほぼ同じでいい。問題はカーブ、旋回時。……肩装備が推進機の場合はそれでバランスを取つてもいい」

機衣人は言つてしまえば金属の塊。右腕一本でもかなりの重量がある……それに格闘ゲームで部位欠損なんて実装されていたことは無い。

「大人しく斬られなさい！」

片手の空いた機衣人に肉薄し、ブレードを振り降ろす。

鈍い金属音が響く。

「……浅い。」

まだまだあ！バランスが何よ！

右に逸れたブレードの勢いそのままに一回転し、そのままの勢いで袈裟懸けする。

再びの金属音。

回転の軸が左へと引っ張られていくのを感じながら、更にもう一回転。

三度の金属音とともに、ブレードからの圧力が消えた。

「つつ！」

「ちよつと、止ま……止まりなさい！」

半ば横倒しになりかけていた機体の水平を無理矢理矯正し、顔を上げれば、先程まで戦っていた機衣人ネフィリムが墜ちていく。

反転、加速。目標は遠距離型。

残り機衣人エヌミー……3体。

◆◆◆

鉛筆騎士王：いやあ、惜しかったねえ

モルド：ま、まあ、隻腕であそこまで粘れたら凄いです

サンラク：ルストは初手隻腕からでも勝てるけどな

鉛筆騎士王：あー、JGEのやつ？ 凄いよねえアレ

サンラク：ジャンキー・ポテト、ネフホロに限ればカツツオより才能あんじやねーの？

◇◇◇

VRマシンから体を起こして見渡す。

スタッフの安堵の顔、不安の顔、心配を装う顔。

「いやあ、惜しかったですね！ 夏目ちゃん！」

笹原さんのいつも通りの心配顔。

「ええ、もう少しだつたけど残念だつたわ。練習しなきゃね」

「……筋は悪くない。慣れれば大丈夫」

ルストさんは……ヤカソマスク表情が読めない。

軽く伸びをして屈伸するあたり、大物のように感じる。それにしても界隈では変な被り物でも流行つてているのだろうか？ シャンフロにもやたらハシリコウと馬の面が多くつた。

『放送終了まであと10分です。フリートークお願ひします』

「ルストさんから見て夏目ちゃんはどうですか？ って聞くつもりだったんですが先手を打たれちゃいましたね！」

「今回ルストさんはゲーム内から解説してもらつちゃいましたが、初心者向けのオススメ構成とかありますか？」

あつ、笹原さんその質問は……

……

⋮

SNSで「早口少女」と「フェードアウト」がトレンド入りした。

空飛ぶポテトの果ての先（深淵）

『さあ、始まりました 10thステージ！』

放送³週目開幕と同時にラスボスの機衣人^{ネフィリム}が遙か遠方に現れる。

『夏目ちゃん調子はどうですか！』

「上々かしらね！」

第1回放送のあと、BLACK DOOL社に思うところがあつたのか、ネフホロ2に実況リンクシステムなるものが導入された。

事前の申請は必要だが、イベントなどで特定のマイク音声をゲーム内プレイヤーにも出力できるというもの。

このお陰で第2回は大盛り上がりとなつたのだから、BLACK DOOL社の判断は正しかつたと言えるだろう。

「ルストさん、今どこですか？！」

「……B—17—24。こちらから合流するからNa^メ2m^グe^グはボス機衣人を目指して」

その位置だと私よりボスに近い。視界に映るのは廃ビルばかりで見えないが、ルストさんはレーダーでこちらの位置も観えているのだろう。

『夏目ちゃんがボスに向かうようです！ルストさんB—17—24と言つてしまましたがまだ見えません！』

『こ、今回のルストの機体はレーダー搭載なので……ルストは夏目さんとボス双方の位置を把握してます。このステージは合流後はボス一択なので、移動しながら合流しようと』

『なるほど……つと、そういうしているうちにルストさんの機体が見えましたね！』

笥原さんとモルドさんの声を聞く前に、私は確かにルストさんを見つけていた。そして、その間に割り込む機衣人^{ネフィリム}の姿も。

『野良機衣人^{ネフィリム}です。殲滅目標はボスですが、これら野良も見つけ次第

倒した方がいいです！』

ブースター出力上昇！^{アップ}

「野良機衣人の装備確認、近接型ね」

「……」

近距離は大鎌^{シザーハンド}、中距離用の連射式衝撃砲^{豆鉄砲}に遠距離攻撃は見たところ無し。この手のタイプは中距離は牽制しながら接近を狙う近接メイントークン構築の可能性が高い。

機体を左右に振つて豆鉄砲を回避。

これで互いに近接範囲^{射程距離}！レーザーブレード展開！

シザーハンドの難ぎ払いは屈んで回避可能！

ギヨリン！

『レーザーブレードの一閃^{クロスカウンター}が決まつたああああ!!これは夏目ちゃん上手くやりましたね!』

継ぎ目を破壊されたシザーハンドがただの鉄塊となつてビルの下へと埋もれていく。

『……あ、はい。そうですね。……これで相手機衣人は近接武器がないので、かなり楽になります。……レザーブレの展開タイミングも良かったです』

『展開……ああ！攻撃の直前にブレードを出してましたね！』

『レザーブレは展開中燃料を喰うので、展開時間は短い方が理想的です。回復アイテムがあるストーリークエストとはいえ、節約は大事です』
『あ、説明しているうちに倒しましたね！グッジョブ夏目ちゃん！』
『……いい感じ。このままボスまで行く』

「もちろんよ!」



鉛筆騎士王：モルドちゃんもテレビ慣れしたねえ。先週はもうそれはコチコチだつたのに

カツツオ：宣伝に逃げるそこの鳥頭より優秀だよね

サンラク：悪魔が猫被つた上に化粧してるようなお前らとは違うんでな

鉛筆騎士王：次言つたらスクショを瑠美ちゃんに転送する
サンラク：おまつ、きたねえぞこの

鉛筆騎士王：この？

サンラク：ルストに至つては JGE から素全開だよな

カツツオ：露骨に逸らしたね……まあ、ルストはペンシルゴンと同じで物怖じしないタイプだよね

鉛筆騎士王：番組の流れや尺を無視して語り続ける辺りまだまだだけどね

サンラク：素人に求めるライン高すぎねえか？

カツツオ：戯れは構わないけどそろそろボスだよ

◇◇◇

「えつと……なんとなく分かつてたけど、大きすぎないかしら？」

「……1⁰ t^h^面ステージのボスは通称ギガント。ネフホロ^{初代}1ボスはこの地に降り立つた最初の機衣人だつたけど、こいつはネフホロ1の世界崩壊を招いたうちの1体という設定で……来る」

ミサイル……！

右下方へ旋回し、ミサイル同士の間に滑り込む。

『ギガントの装備その1、左肩の遠距離ミサイルランチャーです』

まだギガントまではかなりの距離がある。私の機衣人では遠距離は分が悪い。

「……Na₂m^{eg}の構成だと理想はノーダメージ、つまりは

「全部避けろってことでしょ！」

要するに直撃したら十中八九ゲームオーバーってことでしょ！

どこかのガスマスクを思わせる3次元変則立体起動でミサイルを躲し切るルストさんの動きは當てにならない。

とにかく一発を堅実に避ける！

「……次、^{自動追尾弾}ホーミング」

オッケー！ チャンスね！！

なんとなく分かつてきたホーミングの最短回避経路を頭に浮かべる。

ここからは中距離武器での攻撃が通るはずね。

今はエネルギー残量は気にしない。とにかく攻撃と前進あるのみ

！

「……3WAYレーザー、避けて」

『夏目ちゃんギガントの攻撃を避けながら接近を試みます！ここまでダメージゼロです！』

『あ、ミサイルが来ます』

『至近距離からのホーミング！これは避け』

『易いです。いえ、あれは遠距離のルスト狙いなので』

『あつ、ホントですね！あつさり避けてミサイルは後方へ！』

『次のバラ玉は夏目さん狙いなのできつちり避けたいところです』

『……ボスの攻撃パターンを憶えているんですか？』

『前作ではボスでもパターンは数えるほどだつたんですけど、2の動きはほとんど対人レベルです。流石シャンフロシステムです。……とはいってもバターンには限界はあるので、ギガントの各部位を注視すれば予備動作からの予測は可能です』

私も同じ質問を控室でルストさんにしたことがある。

曰く「やつてればそのうち覚える」らしいが、マイナー含む全装備の予備動作をそらで言えるまでには一体どれだけの経験が必要なのか、

つと、また3WAYね。

流石にそこまでは憶えていないけど、銃口を向けられれば次の攻撃に備えるくらいのことはできる。

銃口の傾きからレーザーの拡散方向を確認して、発射と同時に垂直方向に避け……

「……ホーミング注意」

「え？」

直後、発射されるホーミング弾が私の眼に映る。
（メインカメラ）

しまった、3WAYレーザーはフェイント……

いや、

ちがう。

これはディレイだ。

（ネフィリム）私の脇腹を掠めたレーザーがホーミング弾の一つを貫いた。

爆風と白煙が視界の片隅を遮る。

「……フルストさん！」

「……ホーミング残り7」

「了解！」

見えているのは5発、残り2発は煙の向こうね！

3WAYは……チャージまで目測2秒？

置きレーザーを考慮してルートを再構築、マージンを考慮して……ええい、とにかく駆け抜けるわよ！

レーザー光がホーミング弾を撃墜し、そのまま3WAYの銃口に突き刺さる。

「やつとここまで来たわよギガント……！」

レーザーブレード展開！一気に畳み掛ける！

1 HIT、2 HIT、素手薙ぎ払い、回避

6 HIT、回避、そうだゼロ距離レーザー撃つてみよう

7、8……多分17 HIT、

遠距離武器でもゼロ距離多段ヒットならそれなりにダメージ出るのね。ブレードの方が効率がいいけれど。

25 HIT、ギガントの3WAYが左腕から明らかに異音が鳴り響く。

「もうそろそろ限界でしょ！」

エネルギー残量は……回復アイテムポツドマイナス1。

ホーミングはこの距離では怖くない。

バラ玉も問題ない。

刀のように振り回される3WAYレーザーの根元を、腕の内側に回り込むように旋回する。攻撃は止めないし止まらない。

……

舞飛ぶ光線が、突如その軌道を変える。

それは腕の動きとはまるで連動しておらず、3次元的に回転しながら

ら私の機衣人『ネフイリム』の横を通り過ぎていった。

3WAYが地上へと落下していくのを音と空気で感じながら、私は視線を、未だ不動のギガントへと向ける。

ギガントが、いやギガントの背中から轟轟と金属の擦れる鈍い音が響く。

ガコン、と何かが開く音。

『ギガントの背中から腕のようなものが出できました！あれはいったいなんなんでしょうか？！』

『ギガントの第三の手です。一定の損傷を与えるか、装備破損をトリガーにでてきます。まさに……その……奥の手……ですね……手だけに……フフアツ』

ええ。真正面の私にもようやく見えたわ。

第三の手と呼ばれるその腕には、明らかに軽量級では扱えないサイズのチエーンソーが握られている。

ギガントの上半身が唸りと共に捻上がる。ビーム超重量級用紫光鎖鋸チエーンソが上段に構えられる。

次の一瞬にはアレが振り下ろされるのは分かり切っている。

一度距離を取つて……

「……ギガントは超大型……近接装備の射程距離も特殊」
規格外サイズ 第三の手 レンジ

「え、ちょっと？」

もしかしてここも届くの？！

あわててバックステップした私の眼前を、チエーンソーが通り過ぎる。

……さつきまで当たり判定が大きいだけのマトだった巨躯が、攻撃のリーチに変わってるのね。

ネフホロ2では多段ヒットの仕様が追加されたことでチエーンソーは高火力武器に化けている。おそらく比喩無しに1撃でKOされるわね。

背中から伸びた一本腕がチエーンソーの装備部位。右手に見える

けど左右のリーチの差はほぼなし。

バラ弾とホーミングを回避しながら、ギガントの攻撃動作を観察するしかないわね。

動きを観察して隙を探し、そこを突く。シルヴィア相手だと観察する余裕は無いけれど、こいつの鈍足ならその余裕ができる。

とはいえやつぱりあのリーチの長さは厄介なのよね……

近接武器がないから割と楽に倒せるんじゃないかと思つていた私が恥ずかしい。

…………

…………

「これ弱くなつてない？」

待機から一転攻勢、ギガントの懷、胸部パーツの目の前に滑り込み、ブレードを連打する。

標準型の機衣人『ネフイリム』ならここにコアがあるはずだ。

ギガントの身体が唸る。もう一度チエーンソーが来る。

が

届かない。

そもそも背中から生えた腕で真正面を斬れるわけがないのよ。さつきだつて、上半身を捻つて背中を前面に移動させたから届いただけだ。

要点を纏めると

「ギガントは真正面胸元が安置！」

「……正解。……この構成なら」

…………

…………

VRマシンから起き上がり一言。

「いや、硬すぎでしょ、あれ」

「えつと、最短ルートは第三の手が出た時点で背中の開口部から狙い打ち、です……」

「ああ、モルドさん落ち着いたのね。笑いだとスタッフがマイクを切るから状況が分からぬのよね。」

「もちろん、安置を維持して攻撃するのも、正攻法、です」

「皆さんお疲れ様でした！いやあ、流石でしたね夏目ちゃん！」

「……近接の立ち回りのセンスは流石」

「おっとルストさんからも良い評価が出ましたね！夏目ちゃんはどうでしたか？」

「どうでしたか、と聞かれると……そうね。」

「うーん。相性に助けられた感じね。体格差も苦じやなかつたし」

「……ギガントが遠距離型だったのは幸運。近接型ギガントだと N a₂ m_{eg} の構成だと相性微妙」

「私としても予定時間ギリギリでクリアできたのでひと安心……あつ……いや、仕込みとかじやないですよ？今のカット……生放送？えへへへへ」

「ルストもお疲れ様」

「……ん。私はここからが本番」

「スタジオが一度暗闇に満たされ……そしてスタジオのMRがその様相を変える。」

「さて！本日はスペシャル長時間生放送！ご支援ありがとうございます！」
B L A C K D O O L ! まだまだ番組は続きます！」

映し出されたのは格納庫、そこに鎮座する深紅の機衣人が、画面を睨み付ける。

「N e p h i l i m H o l l o w 2 の真髓は P_{対人戦}V P、ここからは夏

目ちゃんと打倒ルストさんを目標にチャレンジをして貰います!!」

サウス t o ウエスト o n フライドポテト

さつきMRで映っていた機衣人、近接装備中心のように見えたわね。

不安なのは武器がほとんど見えなかつたとか。ストーリークエストで使つていた緑の機衣人よりも更に少ないよう見えた。…ギガントのように隠し武器があると見た方がいいわね。

そうなるとこつちの武器構成は……



鉛筆騎士王・ルストちゃんつて背後が見えるウエザエモンだつけ?

サンラク：後ろの目はモルドがサポートする場合、だな

鉛筆騎士王：ぶつちやけ勝率は?

サンラク：0：10

カツツオ：根拠は?

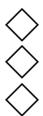
サンラク：銀色覆面少女とのダイアグラム

カツツオ：そりや0：10だけさ

サンラク：だろ?

サンラク：まあネフホロは機体を自分で構築する分、相性差はかなりデカいから、構築次第ではあるが

サンラク：ルストの比翼連理はアレだ、流星の速さを得た妖精真拳
鉛筆騎士王：あー、ティンクルピクシーだつけ?



眼前のスクリーン一面に敗北の2文字が浮かぶ。

ルストさんとの1戦目は一瞬だつた。

当たらない。

見失つた。

接近を許した。

敗因をざつくり纏めるところね。

ルストさんの赤い機衣人……比翼連理は確かに近接特化だつた。

その読みは外れていない。ただ、対策で入れた遠距離装備が尽く躲されてしまった。

次の対戦までのインターバルは10分……生放送だから仕方ないけれど、あまり考える時間もない。とりあえず一度遠距離は捨てて中・近中心でやってみよう。

◇◇◇

「皆さんこんばんは！さつきぶりのエイトちやんでーすっ！」

「……爆薬分隊（ヒトロスクワッド）の夏目恵です」

『ネットでエイト』始まりますよー！ということで早速本題ですが、先程は大変でしたね夏目ちゃん！』

「いや、あそこまで強いとは思わなかつたわ」

「あ、視聴者コメント来ましたよ！『9割準備画面は草』まあ、はい。『夏目ちゃんがんばれ』がんばれー！『強すぎる……バグかな？』いや、バグじや無いですよ。『久々に比翼連理見た』……これはネフホロ1からのプレイヤーの方ですかね？」

「正直なところ、ルストさんが強すぎて方向性が見えないのよね……」コメントを見るにやはりルストさんは相当強い……が無敗という訳でも無いらしく、あの比翼連理も敗けたことがあるらしい。

……視界の端に映る『罵つて欲しい』は見なかつたことにした。

「前回まではストーリーエストを進めて貰いましたが夏目ちゃん！」

「ええ。今回からは対人戦の練習をしていくわ」

「それでは、これから夏目ちゃんには準備に入つて貰います！運が良ければみんなも対戦できるかも！」

◇◇◇

ネフホロ2にログインし、対戦ロビーに降り立つ。

幾つかの視線がこちらに向けられていることを認識しつつ、そのどちらもが静観に留まることを確認する。

「まあ、これは仕方ないわね……」

プライベートならともかく収録中に人目を避けるのは不可能だ。

「番組の趣旨としても対戦相手が欲しいのだけれど……」

対戦募集はえつと……

「これでアイコンが出るのね」

……

「あ、対戦よろしいっすか？」

「あ、えつと『ヘリング・ロー』さん、ね。これネット配信の放送なのだけれど問題ないかしら？」

「え？撮影？これテレビ映つてんの？ウエーイｗｗｗあ、ええ、ええ、かまいませんつすよ。うん全然放送しちゃつて。はい」

なんか微妙に言動が怪しいのだから大丈夫かしら……変な被り物してるし

「あ、これっすか？これは『ＷＭＨ』つつー旧型の通信機のレプリカつす。視界は普通つすよ」

「そうなのね」

「フィールドはどうするつすか？」

……

……

「ヘイヘイヘイヘイ！動きが鈍いつすよー！」

なにあの機体！

突然変形したと思つたら八本足でビルをかけ上つてくるのだけど

?!
ホント何なのアレ??!

「くつ、右に左にちよこまかと……」

ヘリング・ローの——対戦開始時に出てきた機体名称をそのまま引用するなら——『オピリオネス』は通常の機衣人(ネフイリム)の持つ二脚二腕とは別に擬似的な脚を4脚持ち合わせている。飛行能力は皆無に等しいけど、地上での機動力が異常に高い。

「それでもプロつすかー??」

わ

「この……待ちなさい！」

くつ、ここからだと狙いが定まらない……

あと少しというところになるとビルの裏に回り込まれる。

「あくまでかくれんぼするつて言うなら……」うよ!!」

「なんだつけ爆発落ちだつけ？」

「なんでいないのよ！さつきまでこの建物の裏にいたはずよ!!

「爆薬分隊よ!!」

「正義の味方がビル壊していいんですかあ？？？」

「あんたが逃げるのが悪いんでしようが!!」

「この建物でもないのね!!

「おっと失敬、^{ユグドライア}ヴィランでしたねｗｗｗｗｗｗｗ

それはG H : Cの話でしょうが！

「そもそもユグドライアは持ちキャラじゃないのよ!!!」

「こうなつたらここ一帯更地にしてあげるわ！」

「どうか、あなた、私のこと知つて声かけたのね?!」

「そりやそうつすよ？あれもしかしてご存じない？」

「ご存知ないわよ！」

「……いない」
「……」

応答はない……見渡す限り瓦礫の山にしたのだけど、流石に埋まつたのかしら？だとしたらもう少し降りないと視認は難しいわね。

周囲を警戒しつつ、高度を下げ……

ザリリツ

「え？」

左腕が切断されている
「なつ、どうし……」

続けざまに頭部が破壊され視界がブラックアウトする。

どういうこと？姿が見えないのは光学迷彩で説明がつく。でも、こ
こは射程圏外なのよ？なんで攻撃されたって言うの……？

◇◇◇

「対戦ありがとう……もう一戦お願いしても?」

「構わないけど……」

ヘリング・ローが手をちよいちよいとこまねいて……なに? ああ、一端CMに入れつて? 仕方ないわね……

「では、これから……そう、機体の調整をしたら再挑戦させて貰うわ! という事で一端CMー!」

「……アドリブ苦手かよ」

「で、わざわざ配信切つた理由は?」

「いやな、てつきりタネ明かしを求められると思つてから」「それだけ?」

「ほら、JGEでも真っ先に攻略見てただろ?」

「そりやあ説明書と攻略書は先に呼んでた方が効率いいもの。これは番組企画上読んでないけど……ん?」

JGEでシャンフロのWikiなんて見たかしら?

ああ、そういうえば昼休憩の時に……

「……顔隠し?」

「…………バレてしまつては仕方がないな!」

「あなたココでも^{マスク}覆面なのね」

「まあ、Wiki見てないならむしろ好都合かもな」

「どういうこと?」

「ルストと戦うなら一般構築じやダメつてことだ。速さに翻弄されて瞬殺されるのがオチだろう」

実際そうだつたので否定はできない。

「オ^そピリオ^れネスなら勝てるつてこと?」

「コレはダメだ。ルストなら見てから対処される」
じやあなんで出してきたのよ……。

◇◇◇

『ルストを研究してメタを張れ』。カオナシの言いたいことは要約する

るという意味だつたらしい。

「ある意味いつもどおり、ね。問題はセオリートリージャ対処できない、つてことだけれど」

その前に顔隠しとの再戦だ。オピリオネス同じ機衣人オピリオネスで来るのは確定なのだけれど、どうしても解せない点がある。

8脚あつた手足には全て接地歩行用で、噴脚や重力浮脚はおろか、飛行用ブースターも見えなかつた。

どの脚もブレード系の武装で中・遠距離の武装も無かつた。仮に有つたとしても、本体から離れた弾にまで迷彩がかかるとは思えない。

でも確かに、射程圏外の筈のオピリオネスに私の機衣人は撃墜された。

「また建物の陰に隠れてるわね？」

「どうだろうな？」

……

「今は隠れてないわね？」

「無い陰には隠れられないと思うんだが？」

そうは言うが、やはりオピリオネスは影も形もない。やっぱり「光学迷彩」は確定でしようね。センサーは確かにそこに機衣人がいることを示している。

私は確認のために降りたタイミングで攻撃されたわ。私は射的範囲外から攻撃されたのではなく、高度を下げた射程範囲の中に入つたのよ。

仕組みはまるで分からなければ、あの機衣人は見た目の数倍の射程を持つている。

「確かにセンサーを見れば居場所はバレバレだものね」

居場所は分かるのだから、絶対届かない上空から弾を撃ち続ければいいだけなのよ。要するに。

「……いた！」

運良く「光学迷彩」ユニットに被弾したのか、オピリオネスが姿を表したが……あれは……

「ええ……？」

剣、ね。剣が2本、地面に刺さっている。その上にブレードが1本ずつ縦に乗っている。

ブレードは脚に装備されていて……視線を上にずらすと胸……つまり剣の上に直立しているのね……。腕には電動鋸を握っている。確かにこれなら8本脚装甲と比べても、直立から比べても……あれ？

「腕か長い……？」

腕自身も伸縮してゐるの???

手品のタネは分かつたけれど、よけいに謎が増したというか……それ歩けるの？そもそも前見えてる？

「動きに馴れてきたくらいの初心者によく刺さるんだよなこれが」「最初から狙つてたわけね……！」

腕を伸ばして武器を積み重ねてもなお、私の機衣人はその射程外。落ち着いて、冷静に、狙いを定めて……

「どうで知つてたか？『光学迷彩』は『ネフイリムを見えなくする』装備じやない」

「じゃあなんだつて言うのよ」

一斉砲撃！

『接触してゐるモノを透明化する』装備さ

瞬間、目の前で光が爆ぜた。

視界がブラックアウトする。メインカメラをやられたのね。

衝撃と立ち眩みで落下して……落下？

「あ、ちょっとまつて?!どつちが上?!」

射程圏内に墜ちた私の機衣人は、あつさりとそのコアを打ち抜かれた。

◇◇◇

「……『光学迷彩』爆弾？」

ふと言葉に出てしまつた一言は、多分正解なのだと思う。

結局あのあと、ロビーに戻ると対戦希望者の列ができていて、
顔隠しとの再戦はできなかつた。

だからこそ今こうして、完璧な視聴環境で今日の配信の録画をリ

ピートしてゐる。

「光学迷彩」は機衣人^{ネフイリム}を視覚的に隠す装備なので、録画にも多くは映っていない。それでも、序盤と終盤に少しづつ映っていたそれから、分かることがあった。

「頭が無くなってる」

最後の対戦、オピリオネスの頭部が忽然と消えていた。

——ところで知つてたか？ 「光学迷彩」は『ネフイリム』見えなくする』装備じゃない——

——『接触しているモノを透明化する』装備さ——

光学迷彩と爆弾を装備した頭部を自分でもぎ取つて投擲する。それがあの不可視の攻撃のカラクリ。

相手の攻撃に併せてやれば、光学迷彩が破損したと勘違いさせられる。油断して砲撃しようとしたところに、投げた爆弾がズドン。「よく考えるわね……」

世間的な評価は分からないけれど、『パフォーマンス用の自爆装置』だと思つていた爆弾をこんな風に使うなんて……どうかしている。「でも、そのおかしなヤツに負けたのも事実なのよね」

Wikiに伸びそうな手をポテトに進路変更。ここのは美味しいのだけど、なんとなくケチャップを付けたくなる。

「んー。残り少ないわね。今度買い足さないと」

対ルストさん対策はまた録画を見るとして……

「まずは打倒顔隠しね。G_H^{本業} : Cの分も含めて借りを返さないと」

そう心に決めて、私はスマホを開い……あ、ケチャップついた。

万全を期して休養に走る

「対人ランク最近1位……1位保持期間1位……累計勝率1位……過去作ランク1位……『過去作での使用機衣人、緋翼連理を知らない人はいない』……とんでもないわね」

テレビ局とブラックドール社からW·i·k·i等の使用が許可された（どうも初見プレイはストーリーモードだけの話だつたらしい）のでルストさんについて調べているが、本当にこの人アマチュア？という情報ばかり出てくる。

過去作は操作難度のせいで過疎化状態だつたらしいが、それでも、いやだからこそ、それを乗り越えたプレイヤーの中で無敗を続けたことは偉業だろう。

「フイドラークラブ構築……なにこれ隠密と奇襲の塊じゃないの」

ただ、その隠密奇襲が緋翼連理中距離機体にはめっぽう刺さるらしい。とは言え……

「これをそのまま、つてのは番組としては無しよね……」

プライベートならいざ知らず、ゲームを紹介する番組でやることではないだろう。

「とは言え、顔隠しノフェイスは相性を見て機体を作れって言つてたし……」

あちらもプロではないが、昨日の感じと過去の経験から、なんとかそれが正しいことは分かる。

「うーん…………」

チーン

あ、フレンチフライ。

このメーカーのはサワークリームを出さなきや……

◇◇◇

どうにも考えが煮詰まらないので息抜きにシャンフロをさわることにした。

言つておきたいのは、これは行き詰まつて逃げたのではなく、あく

まで気分転換だということ。

そもそもネフホロ2の演算システムは通称シャンフロシステムと言われる通り、G H・Cやもちろんシャンフロとほとんど同じ。つまりシャンフロをやることで、ネフホロとG H・C両方の肩慣らしが出来るのよ。

「まさに一石二鳥、つてね」

ファステイアの宿から起き上がり、インベントリを確認する。

「……やっぱり無いとダメね。チエストリア」

収納鍵チエストリア。

インベントリの所持制限を実質取り扱うという、アイテムを大量に保持する必要がある鍊金術師にとって、必須級のアイテム。
格納鍵インベントリアという完全上位互換アイテムもあるらしいけれど、入手難易度と用途を考えれば、チエストリアで事足りるはずなのよね。

『おかえりなさいペツパー・カルダモン』

「第四階層まで行くわ」

ベヒーモスに乗り込んでブーケ^{ワープ}_{入門証}を提示し、先日到達したばかりの階層まで移動する。

「……狩り、だつたわね」

『よく憶えていましたねペツパー・カルダモン。ですが折角ですから復習しましよう。この階層の突破条件はフィールドに存在する「カンムリタケノコ」を私の元へ持つてくることです』

ライブラリの攻略情報のおかげで第一、第二階層はソロでもクリアできた。一方で第三階層と第四階層は「モンスター討伐」という目的も相まって、パーティープレイが要求される。

ギルドに所属していない私は必然的に野良パーティーを募集することになるのだけれど……

「パーティー募集の方ですね？」

ここには常駐プレイヤー^{ラブ}_{ラブ}がいるので人員には事欠かない。

「ええ。ジョブは鍊金術師でサブ剣士よ」

「これから爆泳魚の生態調査をしに行きますので良ければ、一緒にしま
すか?」

問い合わせとともに送られてきた申請に「はい」を返し、4人パーティーが完成した。

元々予定していたパーティーに割り込んだ形。ライブラリなので他メンバー同士は連携はできると見込んで良いでしょう。

•
•
•
•
•

—

和に仕事にこだわる人

「……8体じゃないか？ほら、あっち」

——ああ、
本當だ

馬の聖職者を極めて一見八十位の老者

歩行音と振動を抑制する 「隠者」の行進

歩行音と振動を抑制する「隠者の行進」と歩行動作を円滑化する「忍唐足袋」によつて、忍装備の（正確には）忍聖は爆泳魚スワイマインに閑知されることなく林を探査できる。

そして接敵しても〔平和主義宣言〕によつて數秒間に戰闘開始判定が発生しない。

「五人そご足元」

を突き刺し……

ニ

• • • • •

「ごめん。ダメだつた」

「見えた範囲は」

忍者の拾つてきたアイテムは先ほどまでと同じ「爆泳魚の堀地鱈」

と「爆泳魚の礫鱗」。

ライブラリの見立てでは爆発特性に関わるレアドロップがある筈……なのだが、入手報告が全くない……らしい。

「やはり、爆発させずに倒さないとダメなんでしょうね」

「ただ、即死火力を当てるんじやダメなんだよな」

「攻撃から体力0までのラグに自爆行動されるみたいだな」

「……自爆そのものを止めるのは?……」

「……拘束魔法はどうだろう?」

「……あれは厳密には行動を封じる訳じゃないから……」

「……例えば麻痺系毒やスタン系の魔法とか……」

「次はそれで……」

回収したアイテムを手渡された私は、議論を小耳に挟みつつアイテムの製作に取り掛かる。

「作れるアイテムは変わらず……爆弾と耐爆ポーションね……」
レアドロップが無くとも爆発系アイテムが作れるのは、爆泳魚の体全体が機雷みたいなものだから、らしい。

「爆発範囲も耐性もほぼ変わらず……ね」

使用アイテム数を増やしても性能が大きくなは変わらない……と言うことは、ライブラリの見立て通りレアアイテムがないと上位版アイテムは作れないのだろう。

…………あれ?

「……ちょっとといいかしら?」

「はい。どうしました? カルダモンさん」

「タケノコ『筍狩り』はいつ頃になるかしら?」

あつ。という擬音が聞こえそうな表情が3つ。

これは完全に忘れられてたわね……。

「そうでしたね。すみません。議論検証に集中し過ぎるのは私たちの悪いクセですね。こちらはまだかかりますから、先に狩りに行きましょう」

「カンムリタケノコはドミニエイト・グリズリーという熊のようなモン

スターの頭に生えているタケノコになります

「W i k i で見たわ」

「なら基本行動については問題なさそうですね」

「まだ検証段階ですが、ドミ……長いので竹熊としましよう。竹熊の移動ルートはおおよそ推測できています」

そういうのは『検証中』項目としてW i k i に載せてもいいと思うのだけど、そこはポリシーなのかしらね。

「……つと、いましたよ」

◇◇◇

「詰めますよ！」

掛け声に合わせて前衛が一斉に溜めモーションに入る。

ドミネイト・グリズリーの外殻は既にひび割れ、パンダのような造形ももう見られない。

それでも、ドミネイト・グリズリーは咆哮を上げ、腕を擧げる。

「ブルズアイ・スロー」！

「【エンチャント：ヴァー・ミリオン】！」

「刃隱心得【影縫】！」からの「スペイラルエッジ」！

「霸山鳴動」！

よしつ！ 怯んだ！

「【エンチャ…つ!!

「カルダモンさん！ 爆泳魚来てます！」

リキヤスト！ 間に合うわけない！

「伊達に投げ続けてないのよ……！」

「ありがとうございます！ ……【エンチャント：フレイザード】！」

さつきの連係でドミネイト・グリズリーはあと一押し、なら私は爆泳魚に徹するのみ！

とはいっても

「これ以上来られると投擲じや間に合わない」

私の腕は2本しかないのよ！

「どうする？使う？というか使える？」

2体、3体爆破。残る敵影は……たくさん。

「セスナさん、幻覚と混乱を防ぐ魔法は使えますか？」

回答は詠唱によつて返される。

それを確認して、私は踊る。

いくわよ。エグゾーディナリースキル、「霧幻萌踊」！
ジャツカロープ

地雷源でタップダンスなんて正気じやないと普段なら思うけれど、ここはシャンフロ。ケイオスシティじやない。

『生態系を再現した』からには土壤もその中の菌も再現されてる筈、そうよね？！

踏みしめる足が大地を揺らし、呼び起_こされた菌類は幻覚を生む。

幻覚を得た熊は虚空へと腕を振り回す。

幻覚を得た魚は……一斉に起爆した。

「え、これ攻撃判定なの?!」

酔つて動かなくなる予定だつたんだけど？！

「いえ、爆泳魚の自爆は攻撃を受けた際の反射行動ではなく、どちらかといえば種子を遠くへ飛ばそうとする植物のような、子孫を多く残そうとするための行動のようとして……」

「個人的には今使つてたスキルの方が」

「はいはい。説明も質問も後回し！次が来る前にドミネイト・グリズリーを倒すよ！」

ああもう、よく分からぬけど今は動くしかないわね！

やつて良かつた舞踏鎧武伝！
ダンシングアーマー

ラウンド中常に踊り続けることを強要されるゲームデザインのせいでコアゲームに落ち着いていたし、私も正直苦手なゲームだつたけれど、霧幻萌踊との相性が抜群に良い！

タップ、タップ、タップ、ダンス判定が崩れない程度にリズムを崩してタップ！

直剣用意、ヨシ！射程距離、範囲内突入！

喰らいなさい渾身の回転上段斬り！

ドシッ

バファツ

「カルダモンさん?!」

「サブ剣士って言つたでしょ！」

とはいえバフ無しじや火力が

「なら纏めて掛けますよ！【エンチャント：ハイストレングス】！」
新しい爆泳魚スワイマインが来る前に終わらせる！

「兜割り」！

「霸山鳴動」！

「獸爪乱華」！

◇◇◇

『はい。確かにカンムリタケノコですね』

「ありがとうございます。お蔭で次に進めるわ」

「いえいえ。こちらこそ霧幻萌踊ジャツカラーナの情報ありがとうございました」

『進む子と留まる子、我が子も様々ですね……彼女は快く思わないで
しようが、私は歓迎しましょう』

W i k i によると次の階層は……

……

『素晴らしい働きです、我が子よ。第六階層へと転送しましょう』

「お願いするわ」

初見殺しの黒死の天靈対策がわかつていればどうということはないは、実のところ鍊金術師とはかなり相性が良
い。アイテム管理と投擲スキルにこれ程特化したスキルは他にはないで
しようね。

「アイテム補給は……次の階層には要らないわね」

なんたつ第六階層て次こそ、私の目的地。
狙うはただ1つ。

……

「え？ 売つてない??」

「私たちも散々探したんですけどね、どうもり、リヴィアアイアサンにしか置いてないみたいで」

◇◇◇◇◇

「……どうしたものか」

あ、マスター、ポテト追加で。

「無限インベントリはリヴィアアイアサンにしかない、と」

リヴィアアイアサンは新大陸にある。

新大陸へはリアルに数日かかる船旅が必要。

そこからリヴィアアイアサンを攻略して、スコアを稼いで、チエストリ

アを探して、

王国の戦争イベントはもうすぐそこだから……

「間に合わないわよね……うーん」

売つてもらうか、諦めて追加インベントリアクセサリで我慢するし

か無いか。

ズゴゴツ

考えながら飲んでいたら、コーラもどきが無くなってしまった。
マスター！これおかわりね！

「あれ？お姉さんどうしたの？蛇の林檎で」

やけに顔の整った男性——VRでは珍しくもない——はそのまま
隣の席に座る。

え？なに？この人？

「ああ、こっちで会うのは初めてだっけ？」

そう言い指差した先に書かれていたのは、あるプレイヤーネーム
だつた。

『アーサー・ペンシルゴン』

名前を見たのを確認し、男は笑みを浮かべた。

「1つ、耳寄りな話があるんだよねー」

マインスタイル

真紅の不死鳥が天を駆ける。

右へ左へ、などという二次元のレベルではない。

上下左右前後、XYZ軸、動きの一切予測できない高速三次元拳動。研究し、見慣れた筈の拳動が、瞬く間に変わっていく。

眼前の比翼連理に、私ができることはもう、1つしかない。

この機体を信じる。

そして不死鳥を倒す！



正直に言えば、高速の三次元拳動というだけなら、私にも心当たりが大きいにある。

ただそれはあくまで数多の直線の組み合わせだつた。かつ、足場を要するために、その組み合わせには上限があつた（あるはずだ）。これには上限がない。

加えて、私はその有限の組み合わせにも勝てたためしがない。
いや、ワールドトッププレイヤーとアマチュアの学生を比較するのは根本的に無理があることは分かっている。

しかし、そのゲーム性からプロ大会がほとんど行われなかつた初代Nephilim HOLLOWに限つて言えども、ユーザー大会の覇者は実質的に日本最強のプレイヤーと言つて差し支えないだろう。
望　潮は二番煎じで番組的に華がなく、またルストが警戒し、対策している可能性もあるから使えない。

ただ、比翼連理の三次元拳動がおおよそ無限のパターンを持つといふのであれば、対する私の機衣人の構築パターンもおおよそ無限なのがネフホロシリーズ——構築型ロボット対戦ゲームだと思う。

現にヤカン頭のPLによる比翼連理初撃破&勝ち越しも、機体構築の相性の面が大きいように見えた。
そしてそれは、Na2m^私のプレイスタイル——相手の個性とリズムを研究し対策する——に通ずる部分が大きい。

ゲーム性は私に味方している。つまり今、私がまずやることは「……比翼連理の対戦動画を網羅すること」

そのためには熱々のフライドポテトとコーラよね！

(冷たいポテトも美味しいわよ?)



恵：ということで、顔隠し^{ノーフェイス}にアポを取りたいのだけど

慧：あー、まあ速さに慣れたいっていうのは分かるけど……シリ
ヴィアは？よくG H : Cで対戦してるよね？

恵：とつぐにやつてもらつたわよ。ただ、こう、速さの種類が違う
のよ。

恵：それこそネフホロ版ミーティアスみたいな動きなの。贅沢な文
句なのはわかってるわ。

慧：つまり、仮想ルストにはならないから顔隠しはどうか、つてこ
とね。

慧：たしかにあいつならそれなりに再現出来るかも。

恵：でもそれなら直接アポ取ればよくない？シャンフロのサンラ
クつてしまつてるよね。

慧：目撃情報が錯綜しすぎてて捕まらないのよ。察して。

慧：ああ、フレ登録してないのか……。

慧：分かった。連絡しどく。

恵：ありがとう。助かるわ。



サンラク：そこの魚類じや相手にならないと聞いて

カツツオ：それもしかして喧嘩売つてる？

サンラク：口ボゲー苦手なのは事実だろ。

サンラク：京極には負けるね。

カツツオ：アポカリップスの京極ちゃん凄かつたね……

カルダモン：……本題に入つて良いかしら？

サンラク：要するに仮想ルストやれつてことだろ？

カツツオ：サンラクならできるでしょ？ほら、なんだつけ。炭酸入りの造花みたいな名前の……

サンラク：コーラシアス・ライラックな。

カルダモン・シャンフロとかG_{ガラクシア・ヒーローズ} H_{カオス} Cでも変則機動してたで

しう？

サンラク：まあできなくはないが……

カツツオ：なにがあるの？

サンラク：ユニークが控えてるんでな
カツツオ：甘いねサンラク。僕はもうレイドに生きると決めたんだ。

サンラク：で、本音は？

カツツオ：後でペンシルゴンにチクる。

カルダモン……ねえ、

サンラク：まあ四六時中つてわけでもないしな……



『さあ始まりました！夏目ちゃんはいつたいどんな機体でルストさんに挑むのでしょうか！』

『本日はメグちゃんの所属する爆薬分隊から、魚臣慧さんにお越しいただきました！』

『どうも、魚臣です。こうして出演させていただくのは、G_ガH_オC以来ですね』

『……ソウデスネ』

『あっ、出しちゃいけない話題だつたかな？えーとモルドさんとは、どうですか？うちのメグは』

『……あ、ええと、初心者は完全に脱してます。力……魚臣さんはネフホロをやられたことは？』

『1の頃に数回ほどやりました。ただ、ロボゲーは肌に合わなくて……今の旋回は僕はできないです』

『……あれは初心者はかなり苦戦します。ただ、ネフホロ2は操作性がかなり良くなつてるので、力……魚臣さんもできるようになると思

『います』

『あ、カンペ助かります。今回はネフホロ2でも特に広いステージをメグが選んだ、と』

『緋翼連理は近距離機体なので、接近に時間のかかる大型マップを選ぶのはベターです。ただ、その割にはメグさんのネフイリムに遠距離武器が見当たらないのは不思議です』

『あつ、そうですよね！遠距離なら一方的に攻撃できますもんね！』

『メグがそこら辺気付いてない筈はないけど……』

『そういうしているうちにルストさんが視界に入つてきました！』

『え?!早くない？今広域マップって言つたとこだよ？』

『緋翼連理はかなり機動力の高いカスタムなので……普通のネフイリムなら倍以上かかります』

『お、メグもルストを視認しました！中距離砲で迎撃してますが、これは当たらない』

『ルストさんは本当に被弾しないですよね。なんて言う間にぐんぐん距離を詰めていきます！』



分かつてはいたけど、当たらないわね。

今日は真剣勝負のため、スタジオの声はこちらに入らないようになつてている。

けど、今頃当たらない、って言われてるんでしうね。

「でもこれは想定内……！」

過去の対戦動画とストーリーモード、前回の試闘、そして実績。こうなるのは目に見えてた。

だからこそ、普通じゃない方法を使うしかない！

いくわよP—CORN！

『これは恐らく、なんですけど』

『はい？』



『メグは「当たらない前提で」広域マップを選択したんじゃないかな』

『えっと?』

『……ルストの回避性能を把握した上での選択となると……純粹な時

間稼ぎ?』

『溜めが必要な武器つてことですか?』

『可能性はありますけど……それらしい装備があの機体には見当たら
ないです。ほかには……あれ?』

『モルドさんなにか?』

『エイトちゃん、気付かない? ほら、メグの回りに』



……これは気付かれたわね。

急接近してきたルストさんが、接近軌道を直線から旋回に変えた瞬
間、そう感じた。

牽制とまぐれ当たり、そしてもう1つを期待した中距離射撃を難な
く躱し……やはり接近してこない。

「……珍しい装備」

その当のルストさんから通話が通る。

「不可視の爆弾を対人で見るのは初めてかしら?」



『初めて聞く装備ですね。よく見えませんけど……?』

『不可視の爆弾は設置型の空中機雷になります。……類似武装として
空中機雷・迷彩爆弾もありますが、不可視は名前の通り目視では見え
ないのが特徴です』

『ルストはこれを察知して接近をやめたわけだね』

『不可視の爆弾は目視では見えませんが、レーダーでの索敵には引っ
掛かるので、ルストも接近前からあることは把握していました。レー
ダー上に機体以外の小反応が出るので、初心者でもなければまず引つ
掛けりません』

『メグちゃんの作戦としては、爆弾で距離を取らせつつ中距離から攻

撃ですか?』

「カモフラージュマイン不可視の爆弾を対人で見るのは初めてかしら?」

メグがそう言つたとき、モルドが一瞬目線を逸らしたのを僕は見逃さなかつた……が、指摘することでもない。

エイトちゃんが気付いてないならこのままで良いだろう。
その方が多分、番組としては映える。

◇◇◇

正確には使つている人がいないわけではないが、レーダーで感知可能ゆえにほとんど初心者しか引っ掛けられない地雷、というのが、Wi-Fiでのこの武器の評価だつた。

その点、ステルスマイン迷彩爆弾はレーダーにかかりないが、代わりに目視が可能なので、やはり確認を怠りがちな初心者にしか通用しない。

どちらの索敵にも引っ掛かるスカイマイン空中機雷と併せて『機雷系は対NPC専用武装』というのが一般認識らしい。爆弾なだけあって火力は高いから当たれば強いのよね。

ルストといえども、迂闊にこの機雷ゾーンには突入できな……

「!」

突つ込んで来た!なんであの数の地雷を避けれるのよ!?

「ステルスマイン迷彩爆弾も含めたらかなりの数ばら蒔いた筈なのだけれど!?」

そう来るならこっちにも考えがあるわ、ルストの移動先を予測して任意起爆を……

「……遅い」

幾らなんでも軌道が複雑すぎる!

あんなのどうやつて予測しろって言うのよ!

爆風をことごとく躰した緋翼連理が私の眼前に現れる。

やつぱり遠距離なんて性に合わないってことね!



『ここ』でメグちゃん、両拳を構えた！』

『僕と同じく、専門は格ゲーですからね、あれが結局は一番馴染むんで
しょう』

『ですがメグちゃん、押されています！』

『……設置型武器を2つに格闘用の装備まで搭載した分、機動力がか
なり低いのが辛いです』

ルストの機体が速度偏重なのもあつて、後手後手になつてているの
は、素人目でも分かることだろう。

『あーっと！体勢を崩した！ルストさん見逃さず追撃！』

三度の轟音と同時に、スタジオが白く染まる。

『……』

『……え？』

『……あ、大丈夫ですよ。スタジオで火事はありません！』

『いや、流石に分かるよエイトちゃん』

『そ、そうです？……あ、見えてきました！』

ARによつて投影されていたスマートが晴れていく。

そこに映るのは、

『あーっと！ルストさん右手がない！メグちゃんはダメージはあるよ
うですが両手完備！』

爆破によつて腕をもがれた緋翼連理だつた。



損傷は……まだ許容内ね。左腕部は次やつたら流石に危ないか。

でもそれだけの価値はあつたわ。緋翼連理を片腕にできたのはか
なり大きい。

再び接近を仕掛ける緋翼連理にカウンターを合わせにい……きた
いけどまだ。今ではない。

引き付けて、引き付けて、……ここにカウンター！

「……つ！」

お互いの攻撃が空振る。

「……設置したね……!!」

「お互い片手ならなんとかなるつて算段かしら？」
「お互い片手ならなんとかなるつて算段かしら？」
「お互い片手ならなんとかなるつて算段かしら？」

「そうはさせんか！」

「任意起爆！遠方3基！」

「リロードまで3秒、

「…………よそ見厳禁」

「爆音と爆煙に、視線が逸れた一瞬。

その一瞬で、ルストは確実に私の懷に潜れる。だから

再びの破裂音と爆煙

「敢えての先行自爆つてわけよ!!」

爆発の衝撃で、実際のダメージ以上に私の機衣人(ネフライラム)が後方に吹き飛ばされる。

「…………逃がさない」

「いいえ逃げるわ！」

比翼連理(ルストさん)進行路の機雷を起爆する。

私の設置した機雷は元々、相互に干渉しないよう配置していた。でも、ここまで戦闘と、何より今私が吹き飛ばされ衝突した。

位置ズレを起こした機雷は誘爆する！

「当たれば上等！ダメでも煙幕つてね！」

「…………煙幕は」

黒煙の雲から飛び出た影が迷うことなくこちらを見据えて旋回する。

「その機体だと効果半減……けど」

「当然見えないうちに機雷は増やしてあるわ！」

「起爆、起爆、起ば……全然当たんない!!!」

「この人ホントどういう軌道してるの?!右腕を損壊してバランスなんて最悪の……」

「違う！」

「そうだ！J G Eだ！あの時も片腕を喪つてから、全てをひっくり返

した！
ルストさんは、緋翼連理このネーフィリムは片腕程度じゃ止まらない！

『……まあ言つてしまふと、』

『あのルストを1番簡単（？）に倒す方法は、初見殺しだ』

『そして、次点は……』

瞬く間に超接近した緋翼連理の、左腕の一撃に、同じく左腕でカウントラーを合わせる。

速度が足りない

私の拳が胸に届く前に、私の左腕が溶断される。

いや、これでいい。

起爆タイミングはここしかない！



『またしても大きな爆発！ルストさんとメグちゃん、完全に白煙に呑まれました！』

『放送としてはどうかと思うけど、勝ちに拘つてるのは良いことかな』
『爆発の直前、メグちゃんの左腕が壊されましたね、どう見ますか？』
『……PICORNメグさんの左腕は一度目のカウンター爆破で、かなり損傷していましたから、機体ダメージ量としてはそこまで変わりません。ただこれで、機雷の弾数の上限も半分になりましたから、見た目以上にダメージは大きいと思います』

『この場合、設置済みの機雷はどうなるの？』

『消失せず、残ったままになります。起爆指令は恐らくヘッドにもオプション搭載してるでしようから、起爆もできるでしようけど……』
『まあルストなら既存の起爆の位置は把握仕切つてるだろうね』
『はい。なのでほとんど使えな……あ、スマートが晴れます』

◇◇◇

やつた、やつた！

燻つたソレの晴れた先、見える緋翼連理には翼がない。

あの機体の不規則かつ柔軟性の高い移動力は、半分はあの背中の
ブースターによるものと言つていいはず。

「……ブースター損壊確認」

その眩きと共に、緋翼連理が加速する。

来る!!

先ほどと同じ、左腕のブレードによる攻撃、に右腕を被せる!!
起爆!!

距離を取つた緋翼連理には、確かにダメージが見える。被せるよう
に打つた中距離用工エネルギー弾は……当たらない。

ならこちらは待ちの姿勢を取らざるを得ない。

エネルギーを節約しつつ……いや、緋翼連理は移動にエネルギーを
割いた高燃費機体、節約せずとも相手の方が先にエネルギー切れにな
る！

再び迫り来る緋翼連理に、僅かに軸をずらし……合わせて来たところにパンチ！

ブレードでのカウンターはさせない！起爆!!

パンチの軌道上、拳が通りすぎ、肘と重なる位置での起爆により、ダメージと引き換えに拳は加速する！

ゴガン！という音と共に、緋翼連理が弾き飛ばされる。

「よし！」

これ連発はできないわね。カウンター重点……！

◆◆◆
『これでトドメ!!』
リーサル

画面の向こう、Na2megtの乗る機衣人の拳が、緋翼連理の胴を

打ち抜いた。

「おいおい……マジかよ……」

練習に付き合った身として言うのはなんだが、正直9・1でルスト有利だと思っていた。

現に序盤は速度に翻弄されていたし、カウンターで緋翼連理の片腕を取つたあの場面も、最適手では無かつたと思う。

「そういうや特訓でもやけに直線の軌道には強かつたな」

ブースターをもいだ後から、カウンターの精度が格段に上がつていった。

ネフホロ1からの再現機体とはいえ、ルストを倒したことは純粹に称賛すべきだろう。それも鈍足機体で……そういうや望^{トイドラークラブ}潮^{クラブ}も速い機体じや無かつたな。

もしや緋翼連理の天敵は鈍足……！

まあそれはないな。

取り敢えず祝砲は送つておくか。



……サンラクからだ。

メグが勝利した直後に差し込まれた短いCMの間にメッセージが来ていることに気付いた。

因みにCMは対戦後に高揚したルストが長々と話すと尺がおかしくなるためその対策らしい。

受信はつい先程、まあアイツも練習手伝つて貰つてたし、放送を観ているんだろう。

まあ内容はおめでとうとかそんなところだろうし、ちやちやつと読んで……

……

「ケイさん、どうしました？」

「ん、いや？ＣＭそろそろ終わる感じ？」

「はい。あと10秒程で……だいぶ顔をしかめてましたけど……」

「ああ、大丈夫、もう始まるね」

そこまで言うならロボも乗りこなしてやるよ。後でメグにコツとか聞こう。

よし、切り替え完了。

……

「メグちゃんおめでとうございます！ルストさんは対戦して如何でしたか？」

「はい。機体の構成としては……」

赤く赫く蝶にむけて

私が目覚めたのは、ベヒーモスの休憩所。

「期限は、つと、まだ余裕あるわね」

アーサー・ベンシルゴンからの依頼——爆弾と花火の納品——のために、爆泳魚^(スワイマイン)を狩りに来たわけだ。

「あれ、カルダモンさん?」

「ああ、セスナさん。今日も爆泳魚の調査?」

「メンバーが今日は来れないでの、図書館で文献漁りの予定です。カルダモンさんは?」

「材料集めにソロで爆泳魚を狩るつもり」

「そうでしたか。ドミネイト・グリズリーにはお気をつけて」



「ベンシルゴンさん」

「いらっしゃい。例のモノ、どうだつた?」

「なんとか用意できただけど、こんなに何に使うのよ」

「んー、ナイショ」

「まあこっちも懐が潤うからいいけど」

「そういうさっぱりしたところ、好きだよ」

「譲渡……ではなく、プレイヤー間での売買処理が行われる。

「強いて言うなら『相手に使わせないため』かな?」

まあ確かに、これだけ高値を出されたら、大抵の生産職はアーサー・ベンシルゴンもといサードレマ、旧国王側に持つてくるだろう。

「でも、それなら……まあいいわ」

「あと、カルダモンちゃんには特別に教えてあげるけど、」

なにかしら

「カツツオくんは初日から焼^{レイド}がる大赤翅^(ボス)に挑むつてさ」

「そ、 そうなのね」

なんで私とカツツオの間柄を知つてゐるよ
喉元まで出かけた言葉を呑み込んで、部屋を後にする。



——やつほー。例のブツ、確保したよー

夏目ちゃんが部屋を出たのを確認して、一報を送る。

彼のログイン時間からして、返事は暫く後だろう。

「これでこつちの準備は良いかな」

そつちの準備はどうなつてるか……

——やあやあ同士諸君。首尾よく進んでいるかな?

——侵食率50%であります!

——G班が進捗率50%ね。もうちよびつとだけ急げる?

——既に応援を手配しております!

——b。さつすがく

——P班ははまもなく完遂予定。

——よろしい。

——ただ、L班によると効果は予定より下がるとのこと。

——L班説明して。

——【報告】リスナー潜伏兵からの連絡によると

……

「おおよそ問題はなさそうかな?」

あとはあつちがどうなるかなのだけど……

「ま、なんとかなるっしょ」

……



レイドボス、か。

ケイに直接訊いてもいいけど、折角なら独自に集めたいわね。

ログアウトしてWikiを開く。

この環境ですらコードに時間がかかる。一般的のプレイヤーはまと
もに見えてるのかしら？

「……ああつたふあつた」

ポテトと今日はこの後もう少しやりたいので珈琲を片手に、ようや
く燐がる大赤翅レイドボスのページを見つけた。

「……あんまり情報無いわね」

出現位置、確認されている攻撃パターン、……普段は待機状態なの
ね。

「……」

ポテトが無くなつた。

◇◇◇

「セスナさん」

「……あ、カルダモンさん！どうされたんです？」

体重を気にせず、食べる感覺だけ味わえるのはフルダイブVRの旨
味よね。まあ、ここに限らずゲーム内のポテトは絶妙に物足りなく
て、ログアウト後にも食べてしまうことが大半なのだけれど。

「ちょっと訊きたいことがあってね」

「なんでしようか」「
燐がる大赤翅には詳しい？」

「ライブラリに対して『詳しいか』ですか」

ちょっと待つていてください、と。

席を外して数分。戻ってきたのはセスナさんと、別のプレイヤー

……おそらくライブラリの人ね。

「ちょっと待つてよ。セートさん」

セートと呼ばれたその人には先客が居たらしく、顔を向ければ3人
分のプレイヤーネー、ム……が……

「あれ？ ペツパーじゃん、どうしたの？」

「オイカツツオこそ」

うーん。こつそり情報を集めるつもりだつたのだけど……まあ言わなければレイドモンスターを追つてる事はバレないわよね？

「僕はレイドモンスターのことと相談に、ね」

タイミングが完全に被つてしまつた、と。

取り敢えず、アーサー・ペンシルゴンの情報が、正しかつたことは分かつたわね。

「オイカツツオさん、ですか。奇遇ですね。カルダモンさんもなんですよ。なんでも燐^{にらがる}がる……」

あ、セスナさんは秘密——

「……ペンシルゴンから聞いたの？」

「その通りよ」

「そうか。まあペンシルゴンは後で絞めるとして、ペッパーも協力つてことでいいの？」

「もちろん。じやなきや来ないわよ」

バレたなら予定変更。がつたり一緒に対策会議でもしましようよ。

「あの、そろそろよろしいですか？」

あ、すみませんセートさん。どうぞどうぞ。

「では先ほどまでオイカツツオさんにお伝えしていた情報の要約からですが……」

◇◇◇

「あー、疲れたーー!!」

セートさん丁寧だし分かりやすいけど話がなつがい!!

でもこれでケイと会う約束が1つ増えたわね！

取り敢えず貰つた情報まとめて……まだボテトあつたかしら。

「ティップソースが欲しい気分ね」

ケチャップ、バーベキュー、本場風にカムバツク……
ハニーマスタードにしよう。

とはいえ、だ。

どうやらケイは燐^{にらがる}大赤翅^{だいせきし}の能力の対策にはもう目星を付けて

いるようだし、できることが少ないのよね。

特に鍊金術士はそこまで火力のあるジョブでもない。選択肢を増やしてサポートの幅を広げる方がいいかもしれないわね。

「そうなると調達元かあ」

あ、ポテト切らしてたんだつた。

冷蔵庫にも冷凍庫にもポテトがない。

「仕方ない、外食ついでに買いに行くか……」



「あれ、メグがいる」

セートなるプレイヤーから説明を受けたのがつい先ほど。情報の整理も兼ねてジョギングに、とログアウトしたのだけど、まさかまた会うとは。

「いらっしゃいませー」

声を掛けようと思つたんだけど……いや、僕も入れば良いのか。小腹も丁度空いているし。

「やあメグ」

「えっ、ケイ!? なんでここに?」

「ジョギングしてたら小腹が空いてね。メグは?」

「私も小腹が空いたのよ」

何にするかな……うん。コーラとハンバーガー下さい。

「メグは?」

「コーラとポテトのX XL……なによ? 2人でつまめばいいでしょ?」

「はいはい」

「あとコーラとWチーズバーガーセット1つね」

「はいはい。えー、すみませんコーラ3つとハンバーガー、ポテトXXLにWチーズバーガーセット下さい」

それぞれの注文品を3人でテーブルへ運んで座る。

「いや待つて。なんでいるのさシルヴィア？」

「ココ、私のティバン、オキマリの店ネ！」

日本に休暇に来て 1 番馴染みの店がハンバー ガーチェーン、というのは、文化的にも健康的にも気になるところだけど……

「人のこと言えないか」

「？」

結局日本料理とか中華料理屋に帰結するんだよね。長期の海外遠征。

「そう言えばシルヴィア、例の件は検討して貰えた？」

「OK」

「そつか。ありがとう」

快諾つて感じでは無さそうだけど、取り敢えず我らが魔王の機嫌は損ねなくて済みそうだ。

別に機嫌を取りたいわけではないが、最近サンラクのせいでヤバそ
うなんだよなあ。君子危うきに近寄らず、だよ。

僕らは君子じやないから危うきに近寄るし道理ごと蹴つ飛ばすこ
ともあるけど、それはそれ、これはこれ。今回はサンラクにはデコイ
になつて貰うと決めているんだ。

「まあそういうわけで、シルヴィアは期間中別行動だから、レイドはよ
ろしく頼むよメグ」

「任せて」

頼もしい限りで。レイドモンスターはどうも基本的に人海戦術あ
りきな気がするし、出来る人間は多いに越したことはないだろう。

「それともう1つ、A·R·ゲームのオファーが来てるんだけど、メグも來
る？」

「えつ？」

「2人1組でプレイできるゲームでね。できれば映えるデュオプレイ
にしたいんだって」

煽られるがままそれで約束してしまったので、誰かしら誘わなければ
いけない、というのは黙つておこう。

「ケーイー。それワタシもやる！」

「いや、シルヴィアはダメでしょ」

「W h y?!」

「今テレビ出たら、またマネージャーに怒られるだろ。それに……」

「それに？」

「A Rは現実の体格でやるわけだからね。身長差がありすぎて多分できない」

「そういうのって、ゲーム側で対応してないの？」

メグの言うとおり、あるにはあるんだけど……

「親子扱いはシルヴィアも嫌でしょ」

「むー」

「ああ、それはキツいわね」

納得いただけたようで。

「で、メグはどう？日程この辺りなんだけど」

「そこなら余裕で空いてるわ」

「オッケー。じゃあ連絡しとく」

「ところで、なんてゲームなの？」

「言つてなかつたつけ？『スクラップガンマン』だよ」

屑鉄の街

屑鉄の案山子

「メグ！そつち1体行つた！」

「了解！」

迫り来るソレに放つた弾丸が空を切る。

——ああ、もうなんで当たらないのよ！

「残弾は？」

「もう分かんない！とにかく節約するわ！」

グローブを装着した手に屑鉄を掴み、同じく屑鉄で構成された
機械兵工ネミーを殴り付ける。

流石に素手ではろくなダメージにならないどころか、自傷判定になつてしまふが、こうして間接的に殴るのは有効だ。

◇◇◇

1時間ほど前。

「……番組収録？」

ケイと私は顔を見合わせていた。

「えつと……聞いてないのだけど？」

「いやいや、メグ、僕もそうだつてば」

スクラップ・ガンマンの大会前に、練習をしよう、という話だつた
筈なのだけれど……

ゲスト枠とは言え参加する以上、未プレイはまずいということは分
かるから快諾はした。こちらとしても初心者丸出しの動きは格好悪
いし、別ジャンルとは言えゲームのプロとしてよくない。

複合ARという関係上、できる場所は限られているので、オープン
なレジヤーランド内の施設での練習になるのも仕方ない。
「フルダイブVRに否定的なお年寄りや自然主義者には、実際に体を
動かすARゲームの方がウケがいいいらしくてね。お昼の情報番組の
収録とたまたま被つてたみたいだね」

と弁明するのはスクラップ・ガンマンの開発元、スワローネストの

社長、津羽目風矢。

「今デイレクターと話してきたよ。うちのゲームも撮るけど、あくまでレジャーランドの宣伝だから、一般利用者として、30秒画面に映るかどうかくらいだつて」

「……マネージャーに確認してみます。まあ、その程度なら多分大丈夫かな」

ケイと2人で練習に来ること自体は通っている話なので、あとはギヤラ関連で揉めるかどうか、なのだけれど……

◇◇◇

結果としては問題はなかつた。

ケイのことも私のことも、番組内では一切言及しないという約束のもと、練習プレイが始まる。

代わり——もなにも、そもそも元から予定など無かつたのだけれど——に制作会社代表として津羽目社長へのインタビューを挟む運びになつたようだ。

「一番奥のルームが貸しきりにしてあるから、二人は気にせず練習しててよ。」

スクラップガンマンの文字を掲げた建物の1番奥——ARゲームというのは現実の空間を使って遊ぶものだ。その上でフィールドを駆け回ることを想定したこのゲームは、さらに広い空間を必要とする。

「こうやって見ると贅沢なゲームだよね。ARつてさてよ。」

「どう考へても一般家庭には置けないわよね」

それこそ大きな部屋1つ……戸建なら建物の階1つをゲーム専用にするくらいの覚悟がないと、スクラップガンマンは遊べないだろう。

「ゲームセンターにも多分無理だろうね。設定でプレイエリアの広さとか変えれるんだろうけど……広い方が楽しめるタイプでしょ?これ」

AR空間を視るためのゴーグルとプロテクター、それとこのゲーム

専用らしいグローブと拳銃のようなアイテムを装着する。

ゴーグルを現実視からARモードに切り替えれば、装備の見た目がゲームのそれに上書きされる。

「ARゴーグルって結構軽いのね。メガネくらい？」

「あまりメガネは着けないから分からないうけど……これを着けて走り回るわけだからね。軽くないと困るでしょ」

「確かに。ゴーグルタイプのVRはもつと重いなと思つたけど、あつちは寝た状態でやるものね」

ゲームモードを選択

——デュオプレイ

プレイヤー種別を選択

——大人2名

難易度を選択

「難易度はどうするの？」

「んー。僕は一回だけやつたことがあるけど、メグははじめてだよね。ノーマルで行こうか」

「イージーって言つたらぶつ飛ばすところだつたわ」

——ノーマル

チュートリアルステージを開始しますか？

——はい

◇◇◇

「……明日筋肉痛かも」

「ほどほどにね」

「でも動きは大体分かつたわ。ステージに行きましょう」

「そうだね。あとは実戦練習つてことで」

チュートリアルを終了しますか？

——はい

——ミッション1——

「いきなり市街地戦か」

「障害物が多くてやりにくいわね」

.....

.....

.....

——ミッション6——

「ここまでやつて分かつたことがある」

「なに？」

「このゲーム、障害物が多い方が楽かも」

「.....そうかも。こう、リアルのスタミナを使うから.....」

岩場の陰、現実にはブロックの上にARが重ねられているそこに、背中をあずけ、一息つく。

「隠れる場所が無いと思つたより辛いね」

「というケイも、私の息もだいぶ粗くなつていてる。

「私、これ終わつたら.....ケイ！後ろ！」

スクラッド！もう来たのね！

障害物、というか平坦なステージだと、とにかくスクラッドの速度と密度が高い。

ここで私たちも移動が大変になる.....のはフルダイブVRの話。

ここは現実空間で映像と実際の地形は合致しない。

大きな障害物や段差はこのレジャーランド側の設備である程度再現されるのだけれど、もつと細かい、例えば砂利道なんかは、現実には存在していないわけで。

「走り回るゲーム性なのに悪路の方が戦いやすい、ってのは感覚が変になりそうね」

スクラッドは路面の設定を忠実に受けるため、相対的にプレイヤーの機動力が上がる。

「考えてるとこ悪いけど、そっちにも来てるよ！メグ！」

.....ととつ。

振り向き様に1発、脚を止めたところでヘッドショット。

「相当良くなつたんじやない？命中率！」

「流石に5面もやればね！」

「次来るよ！」

.....

.....

.....

G A M E O V E R

「このゲーム、弾の節約というか、相当シビアじゃない？」

「最後は完全にリンチだつたもんなあ」

キリもいいので一度部屋を離れて、自販機横のベンチで休むことに。精神力以上に体力の限界を感じる。

「6面つて妙に弾数少ないわよね……」

「体感だと2割ヘッドショットし損ねたらもうアウトなのかな……あの先どこまで続くのかだけど」

おそらくフルダイブでも厳しい部類の難易度なのではないか、そんな空気が漂い始める。

津羽目社長はどうやら撮影を追いかけて各レジヤー施設の説明をしているらしい……スタッフでも無いのに分かるの？

ともあれ、一般客も見当たらず今はケイと二人。

荒くなつた息を整え、深呼吸をする。

「30分休んだら再開しましょう」

「そうだね。……到達してれば続きからできるみたいだ。6面からでいい？」

ええ、そうしましよう。

脳もだけれど体がカロリーを欲している。

自販機で割高なジュースを買いつつ、ケイにもなにかいるか、と声をかける。

「エナドリはある?できればバックドラフト」

「——エナジーカイザーならあるわよ」

「じゃあそれで。僕もライブラジヤンキーはどうかと思つてた」

「そういえば」

ふと思い出した。

「どうしてケイのところにこの話が来たの？」

「あー……まあ話してもいいか。この前シャンフロのオフ会をやつてさ」

「オフ会……羨まし——いやいや、オフどころかオンも一緒に働いているのよ私は。シャンフロのオフ会つてことは、

「天音永遠さんとカボチャさんも一緒に？」

「そうだね。一泊二日でレジャーランドに行つてさ」

「お泊まり——それは羨ましい。

「その時にたまたまスクラップガンマンがあつてね、そこでの社長に会つたんだよ」

「よくスワローズネストの社長つて分かつたわね」

一時の間

何かまずい質問だつたろうか、とお互に飲み物に手を付ける。

「それがサンラク……顔隠しノーフェイスと知り合いだつたらしくて向こうから声をかけて來たんだよ」

「あいつの人脈はどうなつてるんだか——まあそこから芋づる式に僕らもバレてね」

笑いながら苦虫を噛み潰す器用な表情に、こちらも失笑してしまう。

……普通は逆だと思うのだけれど。プロゲーマーとモデルより先に身バレする一般(?)人つてなに?

「で、その流れでオファーが来た、と」

「まあそんなどころ」

「天音さんや顔隠しは参加するの?」

「いやー、無いかな。ペンシル……ん。名前隠しノーネームはこういう言いくるめれないゲームは得意じやないし、万が一ケガしたら大問題だろ」

「顔隠しはなんかできそつたけど、本人は顔を出したくないって言つてたし、マスク着けたままこのゲームするのは無理があるし」

「まず間違いなくフルフェイスあのカボチャまけ」

JGEでもキヤラものメガネで顔を隠していたし、そういう生き

物なんでしょうね。

「勿体ないわよね。爆薬分隊に限らず、引っ張りだこでしょうに」「あいつはあいつで色々あるつてことだよ」

「そう言いしながらもぼそりと「……テレビまで出ておいて今更な気もするけど」と聞こえるあたり、ケイも思うところは大きいのかかもしれない。

「ま、スターインに入らないなら全然オッケーだけどね」「あー……シルヴィアタイプが2人は勘弁願いたいわね」「それもあるけど……ちょっと見たいと思わない?」

「なにが?」

「リアルミーティアスとリアルカースドブリズンの再戦」

あー……見たい、気はする。

「まあ問題はあるんだけどね」

深く頷いてケイがおもむろに立ち上がるのを見て、僅かながらに残っていたジュースを飲み干す。

「もう30分?」

「まだ疲れてるなら待つけど?」「まさか。続きをやりましょう」

6面、挑戦2回目。

.....

7面。

.....

G A M E O V E R

「また弾切れで終わり……これなんかおかしくない?」

「今度は明らかに弾が足りてないよね」

「やあやあ、苦戦してるみたいだね」

足音に目を向ければ、津羽目社長がガラス扉を開けている。

「津羽目さん、インタビュ－終わつたんですね」

「なんとかね。いつものことだけど注文の多い料理店だ」

それはそれとして、と言葉を続ける。

「7面で詰まつたか。これはヒントが要るかな？」

「7面はまだ1回失敗しただけです」

「初ゲームオーバーは6面、つてとこかな」

「……なんで」

「F·P·Sに慣れた人はここら辺で詰まるのさ。魚臣くんはF·P·S得意な方だろう? R^{ルインズ} W^{・ウォーム} H^{・ハウジンズ} 6もやつてたし」

そちらもそうだけれど、それより今……いや、この人ならあのESPNサーから直接聞いた可能性もあるか。

「F·P·Sに慣れた人ね……」

「中々に引っ掛かる言い方だろう?」

「……ゲーム仕様から見直すか」

それなら私も……と棚に置かれていた待ち時間用のルールブックを取る。

このゲームの根幹は、タイトルにガンマンとあるようはシユーティングだ。

敵^{スクラップ}を倒したあと「スカベンジャーグローブ」を利用して剥ぎ取り、再利用する「リビルドシステム」がウリで、銃を強化したり、剥ぎ取った素材を弾として発射することができる。

つまり実際の使用可能な弾丸数は、初期所有+取得可能な弾数+剥ぎ取った素材数になるわけなのよね。

これだけ聞くと、倒した敵から剥ぎ取つて弾にして敵を倒したら剥ぎ取つて……と無限に撃てるようと思えるけれど、実際はそんな簡単ではない。

なぜなら、剥ぎ取りには、グローブが届く至近距離まで近づかなければ

ばならず、一方でこのゲームは遠距離が主体のFPSだからだ。

敵が多数いる中、倒れた敵に近寄って剥ぎ取るのは危険だし、かといつて一掃してから、と考えていると剥ぎ取りのタイミングを逃す。

「……これだ！」

何か見つけたらしい。えっと、ケイが見てるページは……

「うわっ、メグ、そこにいたの？」

ちょっと覗き込んでただけじゃないの。シルヴィの方がいつも近いですよ。

「やりながら説明するよ。あと社長」

「ん？なんだい？」

——このどこがガンマンなんですか

そう言われた津羽目社長は、満面の笑みを浮かべていた。